
Your precious wish is my precious treasure

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Your precious wish is my precious treasure

【Nコード】

N5547D

【作者名】

三条司

【あらすじ】

望みをひとつだけ叶えてくれる。代価が何なのか誰も知らない。噂なのか本当なのか、確かめる術はただひとつ。夜間にのみ活動を開始するという生徒会へと赴くこと。「貴方の望みはなんですか？」

また会おう、ドッペルゲンガー（前書き）

短編として書き上げたものを、短編の連載として掲載することになりました。基本的に一話完結ものですので、どこから読んでいただいても構いません。

また会おう、ドツベルゲンガー

何故、今なのだろう。どうして、今でなくてはならないのだろう。

梶井基次郎かじいもとじろうが生まれたのは大阪。共働きだった両親は必然的に留守がちになり、祖父と過ごす時間がその分増えた。それはあくまでも自然で、ありきたりなようできて心地よくて、基次郎少年は祖父が大好きだった。

第二次世界大戦だなんて、少年たちの世代では記憶の掠れてしまったものを経験した彼の祖父は、しかし、その最中に指を二本失って帰国した。

「おじいちゃんの指は、何でやつつしかあらへんのん？」

聞いた基次郎はあまりに幼く、答える祖父はあまりに優しく。

「おお。じいちゃんうっかりしてるやる。忘れてきてしてもてんそれをのちのち、すっかりそのまま復唱して、小学校の同級生にアホ呼ばわりされたのは、また別の話。」

指は八本でも生活出来るが、ヴァイオリンは弾けない。何故ヴァイオリンか？それも、また別の話。

ともあれ、ヴァイオリンが祖父にとって大切だというのだけは、確か。欠けた手でゆっくりと少年の頭を撫でながら、かの楽器に想いを馳せる祖父に、少年は約束をする。

「ほなら、僕が弾くわ。おじいちゃん、それやったらあかんか？」

「粹なこと、言いおるこやのお」

祖父は破顔し、少年は決意を固めた。固まっていけないものを決意

と呼ぶのかどうかは、ともかくとして。

それから、少年のヴァイオリンとの日々が始まった。芸術をこよなく愛する両親は何の問題もなく小さなヴァイオリンを彼に与え、
ぎいこぎいこと死にかけのコオロギのような音を立て始めた。

「じいちゃん、何や、レコードと違う音やでえ？何でや？」

素直な基次郎少年である。

「練習、せなあかんのう、基次郎。みいんな、初めっから上手いわけと違うんやで。ちゃんと練習しおったやつだけ、音楽の神様が
笑いおるんや」

「神様かあ。僕も、一緒に笑えるようになるやるか」

「当たり前や。じいちゃんの見込んだこやで？そないなこと、聞かんでもよろし」

少年が手にした小さなヴァイオリンは、いつしか少年にとって大きな意味をもつものとなり、彼は音楽を人生のパートナーに選んだ。

「僕、天才とかとは違うけど、せやけど、音楽が大好きや。もっともっと勉強したい」

熱の籠もった瞳で関東の音楽大学受験の為に、関東の高校に行きたいと話す基次郎少年の背中を押したのもまた、彼の祖父だった。もっとダイレクトにお金に繋がる、強いては将来の安定につながる大学に行つて欲しいと願う両親に、祖父は一言、

「行かしてやりいな」

そうしてやってきた糸里くめさと高校は普通科の他に芸術科があり、それはまた、アートと音楽に別れる。めでたく、音楽科に籍を獲得した基次郎少年は、彼なりのスピードで懸命に進んでいた。

コンクールの話が持ち上がったのは、お正月。久方振りの少年の帰省に、一家団樂を楽しんでいた何と云うことはない日常に、その電話は降って湧いたようなものだった。

「もしもし」と半分寝惚けたような声で出た少年は、しかしやがて声に真剣味を増して、受話器を置いたあと、そつと家族を振り返った。目が潤んでいた。

「どないしたんや、基次郎」

「このところ、寝たり起きたりを繰り返していた祖父が、いたずらつこのような目つきで少年を見つめながら尋ねる。

「コンクール、出てみいひんかって。今、林部はしべせんせから連絡があった」

「ほんで、何て答えたんや？」

「やりますて。当たり前やんか、じいちゃん！約束したやん。僕が、コンクールで優勝して、何やもろたら、全部じいちゃんにあげる。せやけど僕、あんまりそういう技巧があらへんやろ？林部せんせも、それがちよつと心配やて言うたはった」

「技巧技巧で、技巧が何ほのものやねん。大事なのは、基次郎、お前の心やろ。ちゃあんと心込めて弾いたら、伝わるんや」

「そんな上手いこと行かへんのや、じいちゃん。僕も自分で判つてんねん。僕が伝えたいことは、もつとちゃんとテクニクを付けてからでないとあかんねん。やけど、このコンクールに出ることで何か、そういう日常レベルのもの以上のものを得られるかもしれへ

んやろ？二学期の終わりにせんせとそついう話をしててんやんか。せやから、せんせもこついう話を持ってきてくれはったんやと思つわ」

「そこまで判ってんねやつたらお前、」

言いかけて、二三度咳き込む。少年の母が慌てて注いだお茶を、湯飲みをしつかりと掴んで飲み干すと、

「好きなようにやつたらええがな」
歯を見せて笑った。

当たり前やんか！と鼻息も荒く答えたのはたったの数ヶ月前だ。

着々と鍛錬を積んで、たまの電話で祖父に経過を伝えて、明日が本番。前日はゆっくりとすればいいと祖父に諭され、基次郎少年は、一人明日の晴れ舞台のためにゆっくりと集中し始める。

関東出身の母の親戚宅にてお世話になっている少年。持ち前の人なつこさで、すっかりとけ込んだ雰囲気の中、夕飯を楽しんでいたところだった。電話がふいにその空気に入り込む。

「基次郎くん、大阪からよ」

親戚の声に、慌てて口の中のを飲み込むと、

「もしもし？何なん？」

いつもの通りに、ふわふわと笑いながら電話に出た少年は、そのままの表情で凍り付いた。しぼり出すように、

「そんなん、嘘や……」

やつのことでそれだけを吐き出す。その顔は、さっきの笑いが張り付いたまま一切の表情をなくして、不気味でさえあった。

「どうしたの？何かあったの？」

怪訝な顔で聞いてくる親戚の目をまともに見ないまま、

「ちょっと、出かけてきます！」

まだ夜は冷え込むというのに、着の身着のまま、少年は玄関を飛び出していった。

何で今なんや。何で。何で。今やないと、あかんのんか？

いやや、いやや、いやや！！それだけは、いやや！！

「自分が為すべきことはな、自分が一番よう知ってんねん。せやから、どないしたらええねん！つて騒ぐ前に、自分に聞いてみたらええんや。」祖父の言葉だ。

そんなこと言ったかて、じいちゃん。聞いたかてわからへんときは、どないすんねん！せなあかんことが、ぎょうさんあるときは、どうすんねんな。僕、僕、まだそんなに割り切れてへんわ！大人やない！

瞳の端に涙を浮かべて、少年はひたすらに走った。向かうは、学校。

桑里高校。そこにある、不思議な噂。少年のようにゴシップに疎い者ですら聞いたことのある、有名な噂。迷信、と言い切る者もいる、『それ』に助けられたという者もいる。

両手を、閉ざされた校門の隣、少し低い壁の上において、ひよいと軽く乗り越えた。こう見えても少年、運動神経は中々のものだ。

一階の南端にある男子トイレの窓は壊れている。そこから、無理矢理体をねじこんで、校内に土足で入る。

履いているスニーカーがきゅつきゅと廊下で音を立てる。警備員に見つかると厄介だ。

慌てて脱ぎ、両手に一足ずつもって、また走り始める。靴下は滑る。何回か転んだ。

目的地は最上階、三階にある歴史資料室。もう今は使われなくなつて久しいその場所が、噂の本拠地だ。

そこには、真夜中に動き出すもう一つの生徒会があつて、それは何でも願いを叶えてくれる。ただし、一つだけ。という噂。

お代は、誰も知らない。

眼前に見えるのは、古びた『歴史資料室』のプレート。朽ち果てそうな木製のそれが、黄金に見える。これが錬金術か。何でもない物質を貴重な金に見せるのは、人間だけが為し得る魔術なのかもしれない。

「すみません！」

言うなり少年は扉を押した。

が、開かない。

「へ、何でや。引くんかな。……ちやうなあ。ほなら、ああ、引き戸か！て、開かへんやんか」

息切れして荒い息を吐き散らしながら、少年は扉相手に色々と試行錯誤してみる。残念ながら、事態は変わらないようだった。

「何やねん！」

どくどくと波打つ血流のせいで、少しばかり気の大きくなった少年が、握り拳を扉に向けて叩こうとした。

と。

形容し難い音と共に、少年の体が扉に吸い込まれた。その感触は、例えて言うなら、ゼリー風呂。

とっさのことに反応しきれなかった少年はそのまま、扉の向こう側に前のめりに突っ伏した。

「いった！痛いわあ、もう……」

鼻をしたたか打つたらしい。膝をつき床に四つんばいした状態で、鼻をさする。鼻血は出ていない。セーフ。そこへ降りかかる声。

「ようこそ、糸里生徒会へ。今日はどういった御用件で？」

立っているのは、漆黒の少年。糸里はブレザーなのに、何故だか黒の学ランだ。上までぴっちりと着こなして、全身黒づくめ。カラスのような少年は、基次郎に手を差し伸べると、その身を起こすのを手伝ってくれた。

「あ、おおきに。あの、……」

照れ隠しに、おもむろに話を逸らそうとする。優雅な笑みでもっ

て頷くと、

「僕は、会長の不知火しらぬいりつか六花です」

「変わった名前ですねえ。あ、僕は…」

「梶根基次郎くん。いつも、君のヴァイオリンを愉たのしんでいますよ」

「へ？あ、ええと、おおきに」

(こんなひと、クラスにおったかいな)

「御用件は？」

つくりものめいた微笑で問う会長。

「あの、何て言うたらええんか…。僕、明日がコンクールなんですけど、今電話があつて僕のじいちゃんが危篤なんやつて。せやから、大阪に帰りたいんやけど、でも、コンクールはじいちゃんとの約束やし、そいで、僕どないしたらええかわからへんくなって」

息を吸うのも惜しい、といったように一気にそこまで話す。そして、そいで、と一言呟くとがくりと肩を落とす。

「梶井くん。貴方の望みは？」

先刻と変わらず微動だにしないその瞳が基次郎少年を見つめる。吸い込まれそうな闇色に輝く瞳。それしか今の少年の心の中で輝くものは、すぐれるものはないように感じた。

「じいちゃんを、死なしたくない、です」

「それは、無理です。残念ながら」

むげに断られて、少年は思わず眉を顰めるが、おかまいなしに會長は続ける。

「ご自身の人生ならともかく、他者の生き死にに関わるようなことは、不可能です」

御法度ですから、と風紀委員の口調で朗々と言い終えると、他には？といけしやあしやあと尋ねる。もう少しましな物言いがあるだろうに。

閉口したままではあかん。何か他のこと。じいちゃん！半ばやけっぱちになりながら、

「ほなら、大阪と東京、両方に僕をいさせることは出来ひんのですか？それやったらじいちゃんの側におることも、コンクールに出ることも出来るやんか」

無理を承知で頼む。

「了解しました。では、席についてお待ち下さい。いま、係の者を呼んで参ります」

係で。ここは、お役所か何かなんかあ？

次はあっさりとOKを出した会長にいよいよ猜疑心のかたまりになつて、それでも渋々と少年は勧められた椅子に腰掛けるが。

順応性の高さをいかなく発揮して、このみるからにあやしげな『生徒会』にも疑問を感じなくなったころ、どこからともなくカラスが現れた。誰かと一緒のようだ。

腰を浮かしかけた少年に、カラスと共にいた誰かが声をかける。

「あ、ええてええて。わざわざ立たんでもええよ、見慣れた顔やろっつ。」

ぎよつとしたどころではすまない。立つどころか、腰を抜かして二度と立てなくなりそうなくらい驚いた。人間、度を越すと何も言えなくなるらしい。

関西弁でそう言った少年は、あろうことか基次郎と同じ顔の人間だった。顔ばかりか、いちいち全てがそっくりなのだ。生き別れた双子の弟でもこうはいくまい。

「桂。梶井くんが驚いてるよ。ちゃんと自己紹介もしないから咎めるような口ぶりで、そのくせ瞳は柔和に基次郎二世を見つめて、会長が言う。」

「梶井くん、ね。あんたの担当になったもりもとかつら森本桂だよ。よろしく頼むな」

流暢な標準語を喋る自分に紹介された。少年はやつとのことと立ち上がり、まじまじと眼前に立っている桂とやらを見つめる。

「僕そっくりなんやけど、これは気のせいなん？」

熱に浮かされたように呟く基次郎少年と、それを聞いて吹き出す桂。

あの…と救いを求めるようにこちらを見つめてくるいたいけな基次郎少年に、会長は優しく微笑みながら、

「彼が、今回の君の望みを叶えます。桂は君と同じ1年生ですよ。音楽科ではありませんが」

「いや、そういうことやのうて、この人」

「ドツペルゲンガーです」

「え！」

にやにや笑いの桂。会長と桂を交互に見比べて、基次郎少年はぽつりと一言。て、誰なんですか？

「おいおい、まじかよ」呆れ顔のまま、

「有名な伝説だろうよ！自分そっくりの人間、自分とური二つ
を見ると死ぬってさ」

「えええ。ほんなら、僕死んでしまっやないですか」

「だから。伝説だって。勝手に人を殺人鬼みたいに言っなよ」

桂が苦笑しながら言う。そして、

「おれはね。鏡みたいなもんなのさ。六花みたいに特殊な例を除
くと、大抵の生き物はおれの姿が、自分に見える、たったそれだけ
のことだ。もちろん、自分の意志で姿を変えることも可能だけどな」

ほうほうと何度も頷いている基次郎少年を微笑ましく見つめて、
会長は桂に向き直る。

「桂。さつき説明した通り。梶井くんは明日東京と大阪の二つの
場所に同時にいたいそうだ」

「わかったよ。で、おれは必然的に大阪担当になるぜ。だって、
おれ、ヴァイオリン弾けねえもん」目を細めて、桂。

「え、せやけど、桂くんが大阪に行つて、ほんで僕のふりをする、
言うことですか？僕自身は大阪には行かれへんのんですか？僕やな
いって、誰か気付かへんやるか」

「何を君自身とするかは、君次第」

どこか含みのある笑みで、会長がそう言うが。どこか釈然としな
い。まるで禅問答だ。すると、会長が学ランの内ポケットから小さ
な試験管のようなガラス製のボトルを取り出す。一向に趣の変わら
ない笑みで、

「では、お支払いを」

「へ、あの、何を払ったら」

失礼、と小さく言うなり会長が基次郎の手をもつ。そして、手の

甲にぶつと針を刺した。突然のことに、少年の体がびくと一度震える。ぶくと手の甲に浮かび上がる小さな血の玉を小さな脱脂綿のようなものに染みこませて、それを丁寧に手にしていたボトルに入れると、コルクのふたを閉めた。

「面白いものをありがとうございます」

秀麗な笑顔で言われる。怪しい。

「それ、何しはるんですか」聞くと、

「おいおい、野暮なこと聞くなよ。お前が聞いたって仕方がないことだろ」

桂に諫められた。自分自信に叱られて、しゅんとうなだれる少年に会長は、

「これは、梶井くん、君の感情のサンプルですよ。これで、僕たちが勉強するんです。人間の感情の機微を」

ほんなら、二人は人間とちゃうのんか、とコメントしようとした矢先だ。会長が音もなく少年との距離を狭めると、ふいに手の平を少年の顔にかざした。と、唐突な睡魔に襲われてその場にはたと倒れてしまう。明らかに異様なその睡魔はしかし手強く、もう一度目を覚まそうと四苦八苦し続けて、それが叶ったのは朝だった。

どうやら夢の中で、起きよう、と藻掻いていたらしい。寝癖の残る頭で、そう解釈する少年である。用意を済ませながら、ぼんやりと昨晚を思い出す。

あれは、夢やったんかな。ほんなら、僕が大阪に行くんは叶わへんことやわ。

やっぱり、じいちゃんのことを思うと、大阪に行きたいけど、じいちゃんの性格を考えると僕はヴァイオリン、弾かなあかんなあ。

そんな重い諦めの様相でのろのろと支度をして、家を出た。少年は、今にも泣き出しそうな顔を必死で笑顔に変えて、いつてきますだけは言う。門を曲がったら少し陰になっているところがある。そこでちよつと泣こう。

「よ。遅いじゃん。待ちくたびれたぜ」

門を曲がって待っているのは、桂だった。もう一度、腰を抜かしそうなほど驚いてみせる少年。さぞかし、サプライズのしがいのある相手であろう。

「え、あれ、昨日、あれは、ゆ、夢」

「こうしておれが目の前に立ってるわけだからさ。夢じゃねえだろ。何だったら触ってみるか？」

こわごわ、震える手で触ろうとして、手袋をしていたことに今更気付く。それを外してそつとその頬に触れてみた。あたたかい。明らかに、生きている人間の肌の質感だ。それに、一人称がおれだというのも、基次郎ではない証拠の一つ。

「ほ、ほんなら、桂くんが大阪に行くん、ほんまに行くん？」

「そういうことになっただろ。おれはそのつもりでほら、もう切符まで買ったからな。新幹線で新大阪までだっけ？」

「あ、うん。じいちゃんのおる病院は、大阪の市内にある足立病院っていうとこやねん。場所、わかるん？」

「それは聞かないと判らないだろうけど、まあ大丈夫だよ。多分お前が道を知ってるなら辿り着ける。そういうもんなんだよ。あ、その前に。一個、やんなくちゃだ」

言つて桂はジーンパンのポケットから何やらを探り出した。それは、小さな針。

ほな早速、とまだ手袋を外したままの基次郎少年の親指の腹に針を突き立てた。昨晚のように血の玉がそこに浮かび上がる。同じ事を自分の親指でもすると、桂はその血と基次郎の血を混じり合わせた。

「これで今日一日はおれとお前はシンクロすることになる。覚悟は、出来てるな？」

自分とは思えぬほど凄味のある顔で迫られる。思わずくくりと頷いたが、シンクロとはさていかに。

その答えは桂と別れたあとすぐに分かることになった。見えるのだ。見えるだけではない、聞こえるし感じる。桂が見ている風景、聞く音、感じる風、匂い、それら全てを基次郎が感じる。おそらく同じことが桂にも起こっているのだろう。

初めはさすがに驚いたし戸惑ったが、慣れてみると新鮮で面白いものである。コンクール会場の控え室で調弦をしているころ、桂は名古屋駅の前を通過していた。たまに桂が喉を潤す緑茶の爽やかさが、頭にダイレクトに伝わってくる。

「梶根基次郎さん、次です」

いよいよだ。

(ま、せいぜい頑張るんだな。こっちはおれに任せておけばいい)
(うん。頼むわ)

そう、任せるしかないのだ。病院への行き方は、説明するまでもなかった。ただ、頭の中でイメージするだけで伝わったのだから。

はい、と笑顔で返事をして、呼びに来た係の女性のあとをついて歩く。舞台袖に立つ。不思議と落ち着いていた。一人じゃない。そんな感覚。ゆっくりと、しかし安定した歩みで、舞台へ、今日のステージへ。

課題曲は何か上手くいった。いつもと同じに弾ければまずまず、と言ったところだと予測していたから、満足できる結果だ。自由曲を審査員にアナウンスして、もう一度調弦をする。

(着いたぞ)

『基次郎！あなた、何でここにいるの！コンクールはどないしたの！』

母の声だ。きつと泣いたのだ、その赤く腫れた目が、大きく見開かれている。桂が、祖父の方に向き直って言う。それは紛れもなく基次郎の言葉であり、感情だ。その仕組みは判る由もない。

『じいちゃんの方が大事やる』

色んなパイプに繋がれた祖父がうつすらと目を開いて、基次郎の姿を認めた。あほ、と口が言った気がする。祖父らしい。

自由曲を弾き始める。意味もなく涙が出そうだった。尚も頭に響く会話。

『じいちゃん。ごめん、帰ってきてしもたわ。でもなあ、後悔はしてへんねんで』

そう。コンクールは受けた方が良い。それが、しなければならぬことだ。でも、それはしたいこと、ではない。会いに行きたかった。大好きな祖父に。どちらも選ぶことなど出来ない。それが人生ってやつだろう。それでも、祖父がいなければ、今の自分はなかったのだから。

『僕なあ、今更言わへんでもええんかもしれんけど、じいちゃんの孫でほんまに良かったわあ。幸せやわ。おかげでヴァイオリンに

も逢えた。それだけやのうて、もっと大事なもんも教えてもろた。おおきになあ』

祖父は最早、話せないのだろう。ただ、薄目に涙を浮かべて、こちらを見つめている。

(それで充分や、じいちゃん。何も言う必要なんかあらへん)

ありがとう、じいちゃん。もっと色んな孝行出来たんかもしれへん、でも、後悔はしてへんで。じいちゃんの愛したヴァイオリンは僕が、じいちゃんの分もこれからずっと面倒みたるから。僕は、これから僕の人生をまっとうするさかい。じいちゃんは先に待っててや。そつちで僕のこと、見守っててや。

最後の和音を弾ききる。息が荒かった。どう弾いたかなんて覚えていない。ただ、感情がはちきれんばかりだった。

控え室で結果が出るのを待つ。予定だと、あと三十分くらいだ。

(どうなんだ、その、調子は。上手くいったのか?)

器用な桂である。この間、桂は祖父に話しかけたり、両親とも会話しているのだから。

(うん。どうなんやろ。じいちゃんが見えて、何やわーってなっしてもたけど、けど、不謹慎かもしれへんけど、気持ち良かった。せやから、ちゃんと弾けたんやと思う)

(何で不謹慎なんだ。お前の思ってるじいさんは、そういう風に気持ち良く弾けるようになるのを望んでいたんだろう。それを、お前も知ってるんだらう)

苦笑する。桂の方が、基次郎のようだ。

(せやなあ。うん。やから、悔いはないなあ。おおきにな、桂くん。じいちゃんに最後にちゃんと会えて良かったわ)

(ま、それが今回の依頼だからな)

(なあ、桂くん。じいちゃん、桂くんのことをほんまに僕やと思ってるんかな)

(多分な)

(その、桂くんにごうやって大阪に行ってもろて、ほんまに感謝してんねん。でもな。じいちゃんを騙してることにはならへんやるか)

(それを決めるのはお前だよ。他の誰でもない)

(うん…)

(お前の人生は、お前のものだよ。例えその中で何を選んだとしても、それはお前だけが為し得る選択だろう)

(せやな。僕はもうこの道を選んでしもたんやもんな。なあ桂くん。ほんまにおおきにな。短い間やけど会えて良かったわ。楽しかった)

(何改まっつてんだよ。言ったる、これはおれの仕事…)

(また、会えたらええなあ)

桂は何か言おうとしたのだろうが、そこで急に音信が途絶えた。一日は保つと言われたシンクロが力を失ったらしい。かろうじて、相手の見ている風景と音声伝わる程度で、桂の感情は、もう基次郎には届かなかった。

「で？」

何かを期待するような、きらきらした瞳で会長が問う。眼前に立つのは黒の学ランに身を包んだ、長身で髪を金色に染めた少年だ。彼は、一瞬の迷いを見せたあと、ばつが悪そうに、

「でって、六花も意地悪だな。結果は知っているだろう」

「うん。梶井くんは、コンクールで優勝。梶井くんのおじいさんは、何とその報告を君がした途端に息を吹き返して、今は元気にしてる。それが、君の言う結果？」

「はあ、とけだるそうにため息をつくとき、金髪の少年は、両手を広げて見せる。」

「知ってるんならさ…」

「桂」

真摯な眼差しを金髪の少年に向けると、静かでありながら奥に熱いものをもった声で、

「僕が聞きたいのは、そこじゃない。もちろん、今回の結果は興味深いものだったけれどね。人間の生き死にはまったく…。それより、梶井くんとたくさん話したら楽しいじゃないか。どうだった。人間と会話をするというのは、どういうものなんだろう？」

「ああ、そういうこと。どういふものって言われてもなあ。あいつ、何かやたらありがたうって思ってたよ。色んなことに。だってさ、おれがあいつの手助けをしたのは、仕事じゃん？なのに、何回も御礼を言ってた」

桂の返答を聞いて、満足げに会長は頷いて、そして、懐のメモ帳に何やら記した。それを覗き込みながら、桂が、

「何書いたの？」

「人間は、よく御礼を言っつて」

「そこを書くんだ？」桂の呆れ声。

「え、どうしてだい？」

と、小首を傾げるさまは、まるで小鳥のようだ。純真そう、というか。

「あいつは、ちょっと特殊なんじゃないのかなと思ってさ。あ。いっこあるか、知らされていないもう一つの結果」

「それは？」

「あいつのじいさん。途中であいつと音信が勝手に消えた。で、あいつが優勝したのは見えたから、実はコンクールにはもう出てしかも優勝したって、即興で話を作り上げてじいさんに言ったらさ。あいつの母親が席を外した時に、じいさんがおれに言ったんだよ。おれが基次郎じゃないってことは判ってる、あのこを助けてくれてありがとうな。いやあ、あれは流石のおれも驚いたな、まさか人間に見破られるとは思わなかった？面白いじいさんだったな」

「ふむふむ。老人、特に男性は面白い」

「いや、だからそこじゃないだろ」

ぼそりとつつこんでから、ふと基次郎少年に良く似た微笑みをその顔に浮かべると、桂はま、いつかと呟き直す。

夕焼けが窓の外の世界をうめつくす。それを見つめて、会長は窓際にそつと立つ。微笑んで、振り返る。

「ねえ桂。今晚は誰が来るんだろうね」

それにも、桂はふわりと微笑むのみ。そうそれはまるで、人間のよう。

魔女チヨコレート

覚悟を決める！

はちまきをきゅつと頭に絞り付ける。そういつのが自分には似合う。そう。うじうじしている自分なんて誰も期待していないはず。何度も何度もそう言い聞かせて、ともすれば自宅に戻ろうとする足を、この深夜に浮かび上がる学校に向けてきたのだ。

榎沢里奈は、ここ桑里高校の三年生で、明日は高校生生活最後のバレンタインデーだ。つまりはもうそろそろ卒業。大学へは所属しているバレー部からの推薦で、今年の春からはこの住み慣れた地元を離れる。

身長は、四捨五入の切り捨てで百七十五センチ。大女だの巨人だのと言われ続けて早何年と経つが、段々と諦めるということを実感した。身長で人間性を決められる。そういうことが、悲しいかな多いというだけのこと。

閉ざされた校門の上に楽々と手をおいて、その軽い体を飛び越えさせる。侵入成功。安いスパイ映画の主演にでもなった気分。南端にある一階男子トイレは窓が壊れている。窓に頭をつっこんで入ろうかと思ったが、それだと非効率だ。窓枠の上を手で持って、足からすりりと入る。柔軟さには自信がある。

目指しているのは、最上階にある歴史資料室。今は使用されていないその教室は、ある意味において非常に有名だ。そこで夜間にだけ動き出す生徒会は、そこを訪れる人の望みを一つだけ叶えてくれるという。もちろん甘い話には裏がある。しかし、そこに訪れた誰かが痛い目に遭ったという噂は聞かない。

警備員に見つかる厄介なので、大股で、だけでも静かに歩いて校舎内を移動する。自分の息遣いをえらく身近に感じる。どうして人のいない大きな建物はこんなに人を不安にさせるんだろう？

古ぼけたプレート。目に入った瞬間、心臓が高鳴る。意識しないようにしていたけど、きつと緊張しているんだろうと自分で分析してみる。そうやって、心を落ち着かす。何事も、諦めが肝心。完璧になんてなれない。緊張して当たり前。自分を鼓舞する。

一瞬でも迷えば、きつと一生この扉を開けられる日なんてこない。そう悟って、思い切りよく扉を開けた。

開かない。

「は？」

出鼻を挫かれるとは。えらく不愉快。

「ったく……」

ぼやいて、押してみる。失敗。じゃあ、引き戸？そうでもない。

「何なの？いい加減にしてよね」

さつきよりも大きな声での独り言。扉を蹴つ飛ばしてやろうと、右足を大きく振りかぶる。爪先が扉に触れた瞬間、まず足が吸い込まれた。引きずられるようにして、体全体が扉に飲み込まれていく。ゼリーみたいな感触がやけに生々しく、気持ちが悪い。カタツムリだとかナメクジだとかは、苦手なのだ。

ぎゅっと目を瞑って、口を閉じる。

空気を肌感じて、おそろおそろ目を開くと、目の前に靴があっ

た。磨かれた黒い革靴と、そこから伸びる黒いパンツ。

「ようこそいらっしやいました。今宵は、どのような御用件でしょうか」

それが、長い夜の始まり。

ぺたんと座り込んだままでいると、そっと手を差しのべられた。そんな扱いには慣れていない。そもそもここは日本だ。紳士の国、英国なんかじゃないのに。

自分で立ち上がると、思っていた通り、眼前の男は自分よりも背が低かった。

そう、思っていた通り。慣れている筈なのに、いつもそっとがっかりする。そんな自分に腹が立つ。

「榎沢里奈さん」

ふいに名前をフルネームで呼ばれて、ぎょっとして顔を上げ直す。

「あなた、誰」

言つて、きちんと男を観察する。黒の学ランを上まできっちり止めている。髪は同じく漆黒。目までもが真っ黒。まるでカラスのような男。どうやら背格好だけで判断すると学生のようにだけんど、にしては何か怪しい。何だか、こちらの態度を見透かしたような物腰。本能的に、怖い。

「僕は、不知火六花。桑里高校生徒会の会長を務めさせていただきます」

「生徒会？制服が違つていうのに？うちの学校はブレザーよ。男も女も。学ランなんかじゃないわ」

「厳しいなあ」

微苦笑して、微かに首を振る。ちっとも困ってなんかいないような素振り。ますます得体の知れない男。何だかこのまま、引き返してしまいたい。でも、そうも言ってられない。

「あんた、誰なの？」

前回よりもはつきりと単語と単語を区別して発音してみせる。先程からの微苦笑を損なわないまま、会長とやらは、

「不知火、六花です。それ以上でもそれ以下でもありません。貴方の望みをここで吐露されては如何でしょうか。僕は、そのためにここにいます」

ぬけぬけと言い放つ。

ふうん、と目を細めて、里奈はわざとその誘いに応じた。負けん気が強い、ともいう。でも、それ以上に本当は、その願いを心底叶えて欲しいと思っていたからなのかもしれない。自分の気持ちというのは、時に、他人のそれよりも理解し難く、厄介なものだ。

「チョコレートを作りに来たの。ここでは普通ではないものが手に入るんでしょう？」

「そういうことも、あるかもしれません」

「そう。そうね。そして、そう、あたしはきつと、その、『かもしれない』、っていうのに賭けに来たのかもしれない。ただのチョコレートじゃなくて、あたしが作りたいのは、もらった相手の人生観が変わっちゃうような、そういうのなの」

言い切ってから、何だか気恥ずかしくなってきた。こんな風に誰かに自分の意見をはっきり言うなんて。無理かもしれないのに。

「承りました」

透き通った、だけれど少しだけこそばゆいその声はまるで、空気を震わす小さな雷鳴のようだった。一瞬、自分の耳を疑って、里奈はさっと顔を上げる。会長と目が合った。

さつきとは微妙に違う種類の笑み。それでも、それは何だか作り物めいていて、彼の真意をつかもうとしたけれど、それはひどく困難なことに思えた。

「榎沢さん。おかけになっていらして下さい。いま、係の者を呼んで参りますので」

自分は、ここで何をしているんだろう？

係の者、だなんてまるでお役所仕事ではないか。気分を害しているつも渋々とその場に大人しくしていたのは、やはり、諦めきれないからだ。諦めた方が、楽なのに。そんなことはわかってる。全てがすべて、割り切れるようなことではない。わかっているけれど。

「お待ちせしました、榎沢さん」音もなく気配もなく部屋に入ってくる、会長がすっと斜めに身を引いた。

後ろに隠れるようにして立っていたのは、小柄な少女。髪はショッキングピンク。それをツインテールにして、背筋を伸ばして立っている。少女は、会長が口を開く前にびよこんとおじぎをすると、

「どうもー。今回の担当になりました、ゆがわたまま柚川瑠です！よろしくー」
マシユマロのような、甘い、くすぐったい声でそう自己紹介すると、小首を傾げて微笑む。砂糖菓子のような女の子。

「どうも」

首だけで会釈した自分は、それに比べてどうだ。わかっている。かわいげのない女。それが長年、自分に課せられた評価。そんなこと。

「じゃあ瑶、頼んだよ」

「あいあいさー!」

おどけて敬礼をして、会長から里奈へと向き直る。瑶は、屈託のない笑顔で、

「じゃー、いつつちよ作っちゃいますか。里奈ちゃんの好きな男の子の人生、変えちゃうような、魔女チヨコレート!」

「里奈ちゃん?」

「へ?あれ?里奈ちゃん、だよ。名前」

「そう、だけど……」

一瞬口ごもって、一瞬迷って、それでも何故か口にした。

「そんな風に呼ばれたこと、ないからさ」

「そうなの?じゃあ、あたしが一番のりだね。やりい」

小さく手を叩いて喜ぶ。そんな仕草が似合う。そして、それは一部の女の子にしか許されない仕草。かわいくて、壊れそうで、まるで綿菓子のような女の子。それは、自分にはあてはまらない。

「さ、里奈ちゃん。家庭科室に行くよー」

短いスカートの裾を翻して、瑶が先導する。フラミンゴのような髪の少女を追いかけているが、ふと後ろ髪を引かれるように振り返ると、会長と目が合った。会ったときから変わらない、表面上は優しいな笑み。そのまま、そっと会長が呟く。

「榎沢さん。貴女は、ご自分で認識なさっているよりずっと、魅力的ですよ」

瞬時に顔が赤くなるのを感じる。恥ずかしい。人前で狼狽えるなんて。俯いて、視線を逸らして、里奈は歴史資料室をあとにした。

目指すは、家庭科室。

目指すは、魔女チヨコレート。

「さーてーとー」

家庭科室の電気を煌々（こうこう）とつけて、瑠が入室する。七つあつたうちの真ん中の机にどっかと胡座あぐらをかくと、

「補足自己紹介ね。里奈ちゃん」

いたずらつこの目で微笑む。

「あたし、魔女です」

「魔女？つて、あの、えっと……」

「うん。魔女なんだ。ほら、女の子だからね。これが男の子だったら魔法使いだよ」

明るくそう語られる。里奈は、どういった表情でこの場を切り抜けて良いか今いちわからずに、とりあえず、つられてへらりと笑った。

胡座を解いて、足をぶらぶらと揺らしながら、瑠が、先程とは違った光をその両目に宿す。

「里奈ちゃんの思い人は、一体どういう御仁なのかね？」

勿体ぶつた口調で尋ねる。予想はしていた質問だったのに、いざ聞かれるとやはり戸惑ってしまう。そんなものなのだろうか。こういうことさえもコントロール出来るような大人に、早くなりたいものだ、と、里奈は切望する。ふうと小さくため息をついてから、覚悟を決める。そう、決心して、ここに来たのだから。覚悟を決める。

「反田将矢たんだしよつやつておとこだよ」

「名前だけじゃわかんないよ」

「何を言えばいいのか、わからない」

「そっか」と、満面の笑み。続けて、

「かわいいね、里奈ちゃん」

真顔で説かれる。頬の温度が急激に上がりかけるのを感じて、必死でそれを押さえる。

「なに、言っただか……」

小さくそう呟くのが、精一杯だ。

「で？その反田ってひとは、どんな人なのかな。里奈ちゃんに、どんな態度で接するのかな。どんな言葉をかけるのかな。どんな顔で笑うの？怒るの？話すの？そういうことだよ。そういう、小さいことが聞きたいの。そんな小さなのがたくさん集まって、人となりってというのが見えてくるんだから」

「反田は……」

言いかけて、また口を噤む。頭の中を、色んな反田が駆け抜ける。言葉を探す。けれど、それを捕まえて言葉に変換するのは、とても億劫な作業に思われた。気持ちを一定の状態にしておくこと、そしてそれを真正面から見つめること。そんなこと、今までしてみたこともない。

「難しいな」思わず洩らす。

「そう。難しくてもいいんだよ、里奈ちゃん。人を好きになるっていうのは、そういうことだから。一言で説明なんて出来ないような気持ちを、たくさんたくさん、ある特定の相手に対して持つ、それが一番起こりやすい状態が、恋をしているときなんだから。何も不思議なことではないんだよ」

不思議なのは、そう語る遥自身だろう。くるくるとその瞳の揺らぎは変わり、今はまるで巫女のような澄んだ目と声をしている。これが、魔女、というものだろうか。

そう自分で思い立ったものの何だか騙されたような気持ちになる。普段の自分なら、こんなこと信用しないはずだ。魔女だとか、何だ

とか。そんなおとぎ話のような話、信じたことなどない。もともと、絵本などを喜んで読むような子供でもなかった。親には、もつと夢を持ってと言われた。そんな自分が、今ここで、魔女だと名乗る少女に耳を傾けている。ここに来ようとした時点で、自分は少し頭がおかしくなっていたのかもしれない。

「ねえ、里奈ちゃん。連想ゲームでもしようか」

唐突に、しかし、決して思いつきではない口調で瑠が言い出した。「反田将矢くんについて、の連想ゲーム。あたしが今から、一つだけキーワードを出すから、そこからどんどんと色んなこと、思い出したり、想像したり、してみてください。で、言いたいことだけ、教えて?」

「あの……………」

話しかけたいけれど、何て呼びかければ良いのだろうか。

「たまき。瑠で良いよ、里奈ちゃん」

どこまでも素直な物言い。羨ましい、のかもしれない。そんな感情は、持ちたくないから、今まで無視してきた。自分は果たして、素直になったことがあるのだろうか。

「たまき…、あなた、いくつ?」

子供みたいで少女のようで、でも老婆のようにも見える。雰囲気さえ、清纯だったり蠱惑的だったり。質問に、一瞬だけ目を丸くした瑠は、やがてその口唇を魅惑的な形に歪めて、

「ひみつ」

とだけ、言った。

バレンタインは明日。チョコレートは今日中に作らなければ。そして、ゲームは今、始まる。

家庭科室のロッカーをこじ開けて発見したインスタントコーヒー

を、これもまたどこかから見繕ってきたマグカップに二人分注いだから、瑠が席に着いた。彼女は、先程と同じ机の上。里奈は、落着かない様子で椅子に腰かけている。

「ではでは、始めましょうかしら」

羽毛で首筋をくすぐるような声音で、瑠がそう告げる。緊張した面持ちで、里奈は頷いた。上手く出来るだろうか。

「出会い！さ、どうぞ！」

言葉は、音だ。そして、音速と同じスピードで思考は走り始める。それはあたかも早送りで見ると大樹の生長のように、色々なものを巻き込んで頭の中を滑っていく。記憶。色、音、匂い、風景、感情、動き。それは言葉に出来ないほどのスピードと量で、正直、里奈自身が驚いたほどだ。それらの中をいくぐって、一つだけを手に入れる。形にする。

「体育館」

出会った場所。音が聞こえてくる。白いボール。体操服がちらつく。映像、映像、そして映像。

「反田の、靴。私服のときの。ぼろぼろなの。でも、すごく似合ってた。あたしは、あそこまでもものに執着して、大切になんてしたこと、ない」

瑠が微笑んだまま、マグカップを手渡してくれる。ひとすすり。まだ、コーヒ―は湯気をたてている。ふと、言葉が独りりに出た。

「進路も、そう。あたしの進路は確かに決まっているけど、でも、反田のようではないの。選択するとかしないとか、それはもちろん

人によるんだから誰が正しいとかではないって判ってるんだけど、でもあたしは多分自分の決断に完璧に満足していない。反田みたいに、笑いたい。反田みたいに、自分の人生をきちんと選択してすっきりと笑ってみたい。それが無いものねだりなのか、反田のものだから余計に輝いてみえるのか……………」

一旦、そう独白し始めると、止まらなくなった。瑤が聞いているかどうかなんて、途中でわからなくなる。まるで、鏡の向こうに自分に良く似た、でも違う自分がいて、その人に話しかけているみたいな気分。

「妬んだり、嫉妬したり、羨ましがったり、そういうことをあたしはしたくない。それはこれからも変わらないし、そういう気持ちが必要だとも、あんまり思わない。だけど、あたしは……………。何だかわからなくなるときがある。特に反田といると。反田を見ているとね、あたしはもしかして、自分の感情を押し込めているんじゃないかって。感情を吐露することだけがコミュニケーションではないでも、でもね。反田はいつも、素直に自分の気持ちをその顔に表している。そして、反田の周りには、いつもたくさんの人がいる。あたしの周りには、いない。それは、あたしがつまらない人間だからなのかな。欠点のない人間なんていない、コンプレックスが皆無の人間なんていない、でも、でも、あたしはこのままでいいのかな。進路は確かに決まってるけど、このまま進んで、あたしは一体どこに行き着くんだろうか?」

論点がずれている。そんなこと、わかっている。あたしは元々、反田にチヨコレートをあげたかったんだ。何故って、反田に自分のことを忘れて欲しくなかったから。反田に、覚えていて欲しい。反田に、追いつきたい。そんな思いがどこかにあったから。

追いつきたい?それは、その気持ちは、どこからやってきたんだ

ろう。反田は、あたしにとって、何なんだろう。そんなの、聞くことすら馬鹿げている。だって、ほんとうは、そういうことは、聞いて知るもんじゃない。知っているものはず。感覚に訴えかけることを、どうして、あたしは明確に理解していないんだろう。どうしてあたしは今、こんなことを考えているんだろう。混乱する。

「た、たまき。あたし」

それを言うのが精一杯だった。それとて、別に意味をなしていたわけではない。ただ、何か言わないと、外界に触れていないと、自分がどこか遠くに行ってしまうそうだったから。不安で、心細くて、そつと瑤を見上げると、彼女はどこか超然とした微笑みのまま、

「うん。大丈夫だよ、里奈ちゃん」と、言った。

一体何が大丈夫なのか、一体何を彼女は理解しているというのか、そんなことはちらりとも脳裏をかすめず、その言葉に、里奈は大いに安堵した。

机の上に、自分のマグカップを置いて、瑤が里奈の顔を覗き込む。その瞳は、まるで底なし沼。どこも見ていない、けれど、どこからも目をそらしていない、そういう眼差し。その持ち主は、そつと笑うと、幼児をあやす母親の口調で、里奈に告げた。

「里奈ちゃん、反田くんのこと、大事に思っているんだね。でもね。里奈ちゃんの、反田くんへの感情は、恋かな？」

瑤の言葉は、里奈の耳に届いていたのに、それが意味を成すまでに、随分と時間がかかった。目を閉じれば、視覚は遮断出来るが、聴覚はそうもいかない。聞こえてしまったものは、遅かれ早かれ、脳に届いてしまう。心に届いてしまう。

「恋、じゃない？」

呟く。

瑠が寛容な笑みを浮かべる。

「その可能性もあるっただけだよ。だって、里奈ちゃんは恋愛という言葉はまだ一度も使っていないもんね。あたしが勘違いしちゃったのかも。相手の人生観を変えちゃうようなチョコって聞いて、わあ、これは大恋愛だあって思っちゃった。恋が一番でもないもんね。バレンタインだからって、恋愛でなきゃいけないわけでもないし。色んな愛があるからねえ。友愛、家族愛、同志愛、エトセトラ。ぜえんぶ、大事なもの」

だから、気にしないで。そんな裏の台詞が聞こえてきそつだ。

今のこの衝撃をどう、言葉にしたら良いのか。確かに、里奈は恋愛経験が抱負ではない。だからといって、恋愛が何たるかを知らないほど、朴念仁ではないと思っていた。数刻前までは。

反田に、恋をしていたのではなかったのだろうか。もし、仮に恋ではないのだとしたら、どの時点で、自分はそれを恋だと誤認してしまったのだろうか。もし、仮にこれも恋なのだとしたら、瑠の言った、いわゆる恋、ではない感情を、なぜ反田に持っているのだろうか。

「里奈ちゃん、里奈ちゃん」

マグカップを握りしめたまま、顔を下に向けてうなだれていると、頭上から瑠の慌てた声が聞こえてきた。ふと見れば、コーヒーマグは湯気をたてるのをもうやめて、茶色い液体はゆらゆらとゆれて、里奈の顔をおぼろげに映し出していた。

「里奈ちゃん。恋愛じゃないから、何なの。一般的にみんなが思っている恋ではないから、一体それが何なの。凡庸である必要なんてないんだよ。良いんだよ。奇抜でなくても良いの。大事なのはね、里奈ちゃんが何を感じたか。そこが重要だよ。一番、重要」

「でも、あたし、反田のこと、好きだと思ってたのに。これが、恋でないなら、一体何なの？」

「気持ちだね、不安定だからね。一応さ、辞書には一体どういった気分をどう呼ぶのかが書いてあるけれど、それにぴったり当てはまる人なんて、そうそういないと思うな。だから、あたしはさつき、恋じゃないかもなんて言っただけど、里奈ちゃんの辞書では、それは恋かもしれない。恋でも良い、恋じゃなくても良い。決めるのは、自分だよ。里奈ちゃん自身が名前を付けてあげないと。里奈ちゃんの、大事な大事な気持ちなんだから。ね。あたしが決めるんじゃないくて、他の誰が決めるんでもなくて、里奈ちゃんが決めるのがいちばん大事」

「自分で、決める……………」

瑤の言葉を繰り返して、里奈はまた黙りこくる。成績も悪くない方だった。運動だって得意だ。でも、今まで自分で何かを積極的に決断したことが、果たしてあったろうか。バレーの推薦で大学に進むのが、一番、賢い選択だと、色々な人から言われた。言われているうちに、何だかそんな気になって、気付けば、進路は決まっていた。推薦を獲得した、と教えられたとき、嬉しくも悲しくも、悔しくも達成感も、なかった。心にメーターがあるのだとしたら、動かなかった。滅多なことでは動かないのだ。自分のメーターは。反田将矢に関わること以外は。

だとしたら。

そのメーターを動かされた、それだけで、反田は貴重な存在だろ

う。反田に、恋い焦がれる、といった感情はなかった。それは認めざるをえない。だけれど、ずっと目で追っていた。反田の周りはきらきらしているように見えた。時に突拍子もないことを言い出したり、現実的に不可能な夢を語り出したり、そんな反田が、まぶしかった。

追いつきたい。反田が見ている風景を、自分の目でも見てみたい。あんな風に、小さなことでくると表情を変えてみたい。それはもしかしたら、雑誌で見るような恋愛の形ではないかもしれない。でも里奈にとっては、それは紛れもない恋慕で、だからこそ、覚えておいて欲しくなったのだ。いつか、いつか必ず反田のようなきらしたものを、自分の手で手に入れたいと、心のどこかで思っていたから。願っていたから。

それは、宣戦布告のようなもの。そして、自分への誓約のようなもの。

長い沈黙のあいだ、瑠は身じろぎもせず、そつと里奈の側にいた。まるで気配など感じられず、里奈が顔を上げると、案外近くに瑠の顔があつて、驚いたくらいだ。

ビー玉のような瑠の瞳を、はじめてまっすぐに見つめて、里奈が言った。反田将矢は、一体どういう人間か。

「質問の答え。反田はね。あたしの、一番愛おしいライバルだよ」

里奈の発言をうけて、瑠が満面の笑みを浮かべる。それは今までで一番透き通った、無邪気な笑顔だった。素敵。そんな言葉が聞こえた気がする。

フラミンゴ色の頭に合わせたのか、ネオンピンクのようにちかち

かしたネイルのついた人差し指を、そつと瑠が里奈の胸にあてた。

「魔女チヨコレイト」

それは、はたして呪文だったのか。

歴史資料室の鍵は、今もぴつたりと閉ざされていて、誰かが入った形跡はない。にもかかわらず、その中には二つの人影があつて、それらは窓辺に立ち、下校途中の生徒達を見つめながら、会話を始めた。

「瑠はいつも面白いケースを担当するね」

「人は誰しもユニークだよ、会長さん」

ふふ、と忍び笑いを洩らすと、会長は近くにあつた椅子に腰をおろす。傍らの少女に、

「さあ。教えてよ。今回はどんなだった」

だんだんと日が落ちてきた。会長の瞳だけが、薄暗い部屋の中で爛々と輝いている。対する瑠は、達観したような眼差しで、

「どこまで言つたっけ？あ、そうだ。里奈ちゃんの胸に、あたしが手を当てたでしょ？里奈ちゃんが今まであたたためてきた、その思いをチヨコレイトにしたの。かけらだけ、もらつてきたから。あげようか、会長」

「ありがとう」

丁寧に両手を差し出して、小さなかけらを大事に受け取る。チヨコレイト特有のにぶい輝きを放つそれを、会長は愛おしそうに見つめる。

「報告によると」「手の平のチヨコを見つめたまま、会長がふいに口を開く。」

「榎沢さん、反田将矢くんには、結局何も言わなかったそうじゃないか。不思議だよ。反田氏に自分の思いを伝えるのが、目的ではなかったのかい？しかも、推薦を取り消してしまっただって？僕が聞いていたのは、人間は失敗を恐れて、安全な道を好む。だったら榎沢さんは、僕が聞いたのとまったく正反対のことをしたことになる。目的だと主張していたことを実行せず、安全な道を蹴って。

……………僕にはさっぱりだ」

秀麗な眉をひそめて、けれども変わらない美貌のまま、呟くように言つと、瑤は、

「会長？人間てのはね、割とあまのじゃくなんだよ。欲しいときに欲しくないって、欲しくもないものをとりあえず欲しいって、そういうことをしたり。反田くんに伝えなかったのは、結局伝えなくても良いことだったからだよ。多分ね。里奈ちゃんはそれに気付いたから。反田くんっていう存在が、里奈ちゃんにとって大切なのであつて、思いを伝えることは、今の里奈ちゃんにとっては、さして重要ではなかったんだよ。それよりも、保険のような意味合いで取った推薦をどうにかすることの方が、里奈ちゃんにとっては意味のあることだった。それだけでしょ」

自信満々に言い切つてから、同じ口調で、多分ね、と付け加える。

「ふうん？わからないなあ」

「人間はさ、あたしたちと違つて、限られた時間しかないから。

だから、その制限時間の中で、いかに自分を見つけれられるかが、大きな課題なんだよ」

「自分を、見つける？」

「そ。何だつて良いんだけどね。夢だとか希望だとか、場合によつては復讐だとか。そういう、何か一本筋の通つたものを、自分の中に見いださないと、ふらふらしちゃう。意見や考えを、あまりにも頻繁に、極端に変え続けていると、そのうち、自分で自分を見失

「っちゃん」

「それは、悪いことなのかい？ 瑠」

一片の邪気もない顔で、会長が傍らの瑠を見やる。苦笑して、

「あんまり、良いことじゃないかもだよ」

そう、と会得のいかない様子で、ぼんやりと会長が相槌をうつ。

「難しいなあ、人間は」

言って目を細めて、校庭に見える生徒達をじっと見つめると、立ったままの瑠を見上げる。非の打ち所のない笑顔で、

「じゃあ榎沢さんは、今は、幸せかな？」

母のような姉のような、それでいて幼子のような笑みで、瑠が答えた。

「それは、里奈ちゃんが決めることだよ」

権花一朝、しかしてそれも（前書き）

六花ちゃんが生徒会発足に至ったきっかけ。

槿花一朝、しかしてそれも

月がいやに光る夜だった。今まで色んな国や都市を転々としてきたけれど、日本の月が一番あたたかい色味をしていると思う。南米ではもっと自己顕示欲の強い黄色。ヨーロッパではもっと冷静で合理的な白銀色。日本の空は低くて、月は橙色。あたたかい、と感じるのは葉楠はすみの血がどこかで、日本を故郷と認めているからだろうか。背中に控えめに微笑する月を感じながら歩いていると、不思議と穏やかな気持ちになれた。

十七歳の今になるまで、実に様々な場所を訪れた。ひとえに、外交官という父親の職種のせいだ。引つ越しの度にメランコリックになる母親と、それを苦笑して宥めすかせる父親。そんな両親を見て育った自分は、どちらに似ているのだろう。

この土地に越してきてから一年近くになる。長い方だ。思い返してみても、一年以上同じ土地に滞在していたことなど、数えるほどしかない。それも、二年以上となると零回ゼロを記録する。

日本の学業システムでいえば高校二年生になる葉楠は、考えても詮無いことを思いつく自分の思考をそのままにして、黙って足を進めた。コンクリートで舗装された道路を踏みしめる靴音。冬と春の出会いが近付いていることを予感させる空気。時折吹く、精一杯な木枯らしの悪足掻きわるあが。そういうものとも、お別れだ。

明日になれば、また空の上。次は中東だという。次はいつまでそこにいることになるのだろう。

旅立つ前日に、その土地で通った学校に夜中訪れる、という習慣は、実は葉楠のまったくのオリジナルではない。小さい頃に読んだ冒険小説。そこでは、大人顔負けの行動力と機転を持った少年少女たちが果敢に闘っていた。想像上のモンスターや大人たちの悪い企みごと。彼らはいつもの仲間を持っていて、一人はみんなのために、みんなは一人のために労を厭わず助け合って困難に立ち向かっていくのだ。そんな冒険譚は幼い葉楠少年の心を虜にした。たくさん読んだ本の中でもお気に入りだったのは、夜中の校舎でいたずらをして回るモンスター退治をする子供たちの話。

モンスターが本当にいるなんて信じて、学校に来たわけではない。いたずらがしたくて来たわけでもない。転校続きの葉楠には、いつも一緒にいられる仲間がいるわけでもない。それでも、誰もいない校舎には、まだ見ぬ仲間が自分のことを待っているような気がするのだ。おせえよ、なんて笑いかけてくれるようなリーダー。待ってたんだから、なんて声をかけてくれるメンバー。十七にもなると自分でも思っけれど、心のどこかで期待を捨てきれないでいるのも真実。

黒とグレーのマーブルストーンに彫られた高校名が月あかりで鈍く照らされる。当然のように閉ざされた校門を、当然のようによじ登って乗り越える。飛び降りるように着地すると、細かい砂の敷かれた地面から微かに砂埃が立った。木枯らしはその最後の抵抗を諦めたようだ。静かな静かな夜。

校舎に入る前に裏庭に回った。名ばかりで活動などほとんどしていなかった園芸部に所属していた葉楠は、おそらく園芸部史上一番の働き者だったはずだ。今日までの毎日、丁寧に面倒を見てきた花壇と二本の苗木。花はもうすぐ開花するとして、この木たちが立派に木漏れ日を作り出すようになるには、一体あとどれくらいの年数

が必要なのか。地面から三十センチほどの高さの苗木の葉に触れようとして、屈み込んだ。

そっと、強くこすり過ぎないように気をつけながら、葉っぱを撫でる。

「明日からはおれ、来れないから。ちゃんと面倒みてもらうんだぞ。大きくなれよ。…まあ、おれなんかがいなくても、お前らには関係ないのかもしれないけど」

「どうして関係がないと思うのですか？」

「そりゃ、植物だもん。おれが世話しようが誰が世話しようが、関係ないだろう。水と日光さえきちんともらえれば、そのうちでっかくなるんじゃない？」

「なるほど。では何故今まで、貴方がその植物たちの面倒を見てきたのですか？」

「それは…、おれ、園芸部員だから」

「義務感で世話をしていたのですね。貴方はとても義理堅い」

「いや、義務感ってそんな大層なものじゃないけど……」

やたらと堅苦しい言葉に葉楠は苦笑した。そんな大がかりな言葉が似合うような行動ではないのだけれど。

と、そこまで考えてからはたと真顔になる。

そして、素早い動作で立ち上がり後ろを振り向く。

そこには一人の少年が立っていた。陶器のようなしみひとつない白い肌、上質の墨色をした髪、ビスクドールを彷彿とさせる漆黒の瞳。すらりと伸びた手足を白いシャツと濃紺のパンツから惜しげもなく出して、細く長い首の上に作り物めいた顔をのっけて、こちらを見つめている。

「誰だよ、あんた…」

驚きで乾いた舌を無理矢理湿らせてそう尋ねた。こんなやつ、葉楠が来たときにはいなかったはず。校門を越える前にも、裏庭に歩いて来る前にも、周囲に人がいないか何度も確認した。今日みたいに静かな夜、足音がすれば気付くはずなのだ。

目の前に急にあらわれた少年は、しかし超然とした微笑みを口元に浮かべると、ぺこりとおじぎをした。まっすぐな黒髪がさらさらと音を立てて重力に従う。たったこれだけの動作でも物音がする。ますます少年に気付かなかったことが奇妙に思えてきた。

「不知火六花と申します」

変わった名前だ。けれど、聞き覚えはない。いやに落ち着いた態度が怪しい。もしかしたら精神異常者の類かもしれない。だとしたら、警戒心を露わにするのは得策とは言えないだろう。葉楠はせいぜい冷静を装うと、相手の神経を逆撫でしないように自らも名乗ることにした。

「小川葉楠」

「おがわ、はすみ…」

白と黒のコントラストのきいた顔の中で一際目を引く、赤い口唇で葉楠の名を紡ぐと、やおら満面の笑みで、

「二年A組の小川葉楠くん。一昨年の十二月に転入。園芸部に所属。品行方正、成績優秀、学校生活での欠点はほぼ皆無。親しい友人はおらず。明日転校予定。…の小川葉楠くんですね？」

すらすらと、何かを読み上げるように六花が自分のことを言うのを、葉楠は黙って聞いていた。

親しい友人おらず。

放っておいてくれ。

気分を害した葉楠は別れの挨拶も惜しんで、その場から去ろうと
きびすを返した。

その後ろ姿にかかる六花の声。

「小川葉楠くん。僕と少しのあいだ、話をしませんか？」

「何でおれが」

「今、ここで僕と君とが出会ったからです。他に何の理由があり
ますか？」

「そういうのは、きっかけて言うんだ。理由、とはまた別もの
だろう」

「なるほど。きっかけ。はい、それでは、きっかけて話をしませ
んか？」

「きっかけで、とは言わない。それを言うなら、きっかけにして、
だ」

「では、きっかけにして」

両手を胸の前で広げてみせる六花が、つかみどころのない笑顔を
顔にはりつかせている。葉楠は、頭上に瞬く月を一度見上げて、肩
をすくめると、六花へと歩み寄った。

歴史資料室。長い間使われていないはずの部屋は、しかし中に入
つてみると案外整然とした印象だった。きよろきよろとする葉楠と
は対照的に、六花は慣れた動作で椅子を勧めて、自身もそのひとつ
に腰をおろした。向かい合う位置で座り合う。妙に近い距離に、葉
楠は少し居心地を悪くした。

「さあ」

「なに」

「話をしましょう」

「だったら、あんたが話せば良い」

「話とは、君がするものでしょう?」

首を傾げる六花に、

「あんたの言ってた話、つてのは、おれの話が聞きたいってこと?それとも、おれに何か伝えたいことがあるってこと?それとも、会話をしたいってこと?」

「おやおや。話、にそんな意味が含まれていたとは。そうですね、どちらかが一方的に何かを伝えるのには慣れていきますから、その、会話とやらをしましょう」

「会話とやら、つて。あんた、会話したことないのかよ」

「ええ、たぶん」

「なんで」

「僕の周りは、僕の話を聞くだけの者が多いからです。そして、僕は誰の話聞く必要もない」

「じゃ、おれの話聞く必要もないだろう」

「いいえ。だって、君は人ですから。僕が知っているのとは違うシステムで動いています。従って、予想が出来ない」

「だから、会話?」

「はい。君は、会話に長けていますか?」

「いや……」

直球の質問に口籠もった。家族以外との会話なんて、長い間していない。世界中をあちこちとしたおかげで、何力国語かは話せるようになった。でも、それは会話とはまた違う気がする。コミュニケーションを目的とした会話とは、葉楠は無縁の状態が長い間続いていた。

「では、ファイファイファイですね」
どこかずれた六花の言葉に、葉楠は首を振った。やれやれ。変わった人間につかまったものだ。まあ、自分にはこれくらいの方が良いのかもしれない。物怖じせずに話せるから。

「会話、とはどういうものですか？」

「そう、だな。多分、お互いがお互いに興味を持っていて、初めて意味を成すものだと思う」

「なら大丈夫です。僕は、君に興味があります」

「それじゃ、かたつぽだけだ」

「君は僕に興味がありませんか？」

「どうだろうな……。興味を持たないようにしてきたから、他人に」

「なら会話は成立しない。そういうことですね。だから、君は今まで会話をしていない」

「そうかもしれない。」

「どうせすぐにいなくなるから。深入りしても無駄だから。」

「そんな風に思っ、自分から周りに馴染まないようにしていた。」

でも、心の底では、仲間に入れて欲しかった。彼らが何を話しているのか理解して、自分が何を考えているのか聞いて欲しかった。

でも、それを言うのはすごく躊躇われた。何故かはわからない。

自尊心？見栄？それとも、拒絶されるのが怖かったのか。拒絶される前に拒絶してしまおう、というのは、ハリネズミのようだ。いざ、誰かに近付こうとすると、相手を傷付けてしまう。優しく出来ない。そしてまた、自分も傷付く。終わらない悪循環。

「いいよ、じゃあ、会話をしよう」

「それはつまり、君は僕に興味を持ったということ？」

「相変わらず、まったく崩れることのない微笑で六花が問う。葉楠は軽く頷いた。」

「素晴らしい」

感情的なはずのその言葉は、実に無味乾燥なものだった。

「あんたは、ここの高校の生徒？」

「はい。そして、いいえ」

「どっちだよ」

「どっちもです」

「意味がわからない」

「夜のあいだだけ、生徒になります」

夜間部、という意味だろうか。この高校にそんなものがあつた記憶はないが、葉楠とて学校を熟知しているわけではない。

納得した様子の葉楠を見て、次は自分の番だと思つたらしい。六花が口を開く。

「どうして君はそんな服を着ているのですか？この高校はブレザー

ーのはず」

「ああ」

言いながら、葉楠は着ている学ランの胸の部分を意味もなく指で摘んだ。

二年ほど前にも日本に滞在していた時期がある。その当時、中学生だった彼の通つた学校の制服は学ランだった。高校指定のブレザーを購入しても良かったのだが、どうせまた転校するのだから、と学校側に話をつけて、学ランで通学することが許された。ブレザーばかりの中での、黒の学ランは目立つ。そう、どうせおれはアウトサイダーなんだ。皮肉っぽく、自分に言い聞かせたりした。

仲間に入れて欲しい。同じものだと思つて欲しい。みんなと同じになりたい。

そう願うと同時に、違ってはいくはない、と思う。同じになつてはいけない。否、同じでは元からないのだから、仲間になどなれなくて当然だ。

「ちよつと、な」

結局言い濁すことしか出来なかった。

「その名称は？」

「学ラン？」

「学ラン……」

呟いて、六花はじつと葉楠の心臓辺りを見つめる。

「いる？」

「要る？いいえ。僕はもう服を着ています」

「そうじゃなくてさ、欲しい？ってこと」

「僕に受け取って欲しいということですか？」

「うん、そう思ってもらっても構わない。どうせおれは、明日いなくなるし。学校にはもう来ないし。制服を使うこともないし」

「では」

何だか人助けをしたような気分になっていた葉楠に、六花は遠慮もなく近づく。上二つのボタンを開けたままだった学ランの残りのボタンを外そうと、六花が不器用な手つきで指をかけた。

「なに、今もらうの？」

「今ではないつもりだったのですか？」

「いや……そうだな、別に今でも構わない」

ただし、自分で脱ぐよ。と、六花の手を押しとどめると、葉楠はひとつひとつボタンを外していく。見守るように、その動作を見つめる六花は口元に手をやると、

「構わない、というのは、意見を述べることを拒否する言葉ですか？」

「なんで？」

「君は、僕がその学ランを手に入れても構わないと言った。僕は受け取って欲しいか、と聞いたのに。それは、僕が手に入れても、手に入れなくても、どちらでも君には差し障りがないということ？」

その通りだ。自分の意見なんて、それが通る機会なんてあつてないようなものだから。葉楠が望むと望まないとに関わらず、世界中を旅しなくてはならなかった。好きになった人間から離れなくてはならなかった。友人になって欲しいと願った人間は、他の友達の元へと、葉楠を置いていった。当たり前の話だ。いなくなるとわかっているなら、固執する必要もない。その場だけの友人を演じていたほうが、どちらにも都合が良い。だけど、その度に淋しかった。がっかりするくらいなら。悲しい思いをするくらいなら。だったら、意見なんてもの、初めから持たなければ良い。

「その通りだよ」

学ランを脱いで、立ったままの六花に突き出す。むんずとそれを掴むと、六花は袖に腕を通した。

「なぜ？」

「悲しい思いをしたくない、と思ったから。かな」

「では、どうして君は笑わないのですか？ひとは、悲しくないときに笑うのでしょうか？」

「…嬉しいときや楽しいとき、幸せなときに笑うんだと思うよ」「君は幸せではないのですか？」

ボタンをぴつちりと上までとめてしまうと、六花は元いた椅子に落ち着いた。それは、六花の鬘のような髪の色にとてもよく似合った。

「似合うよ」

「学ラン？」

「うん。あんたに似合ってる」

おれなんかより、よっぽど。

苦笑のような微笑みを浮かべると、六花がこちらを見据えていた。

「なんだよ」

「君。小川葉楠くん。君の望みはなんですか？」

「なに、それ。叶えてくれるの？」

「叶えて欲しいのですか？」

どっちでも構わない、と答えようとして思いとどまった。

どうせこの国ともお別れなのだ。失うものなど何も無い。だった
ら、言ってしまう方がいい。

「ああ。叶えて欲しい。それが可能なんだったら」

「叶えましょう」

「ともだちが、欲しい」

「ともだち？」

「おれのことを気にかけてくれるやつ。おれがどこにいても、
どの国でどの言語を話していても、おれという存在を覚えていてく
れるやつ。お互いに、お互いを思い合えるやつ。そして、会話が
出るやつ」

言ってしまったから気恥ずかしくて、何を子供じみたことを言っ
ているのだと蔑まれるのではないかと、葉楠は頭を垂れた。

「では、僕が」

言葉の真意がつかめなくて、葉楠が顔を上げる。六花の顔を見た
からといってわかることでもないのに。そもそも、感情の起伏がひ
どく欠落している六花であるというのに。

「僕が、君のともだちになりましたよ」

その微笑みは、出会ったときと同じ、どこか作り物めいていたけ
れど、その後ろに見え隠れする優しさのようなものを感じて、葉楠
は笑った。

「いやに簡単な望みだったな」

「幸せですか？」
「うん。幸せだと思つよ」

あれからもう十年ほどが経つ。葉楠のくれた学ランに身を包む六花の姿はあの時と同じまま。少年にしか見えない。時間の流れが違ふというのは、時に便利で時に不便だ。

人間の感情がどういふ仕組みで動くのかが知りたい。初めはそういう好奇心だった。あの夜、花壇の前に立ち尽くす葉楠に声をかけたのも、単なる偶然に過ぎない。そう、人間と接触できるきつかけが欲しかつただけ。

表面上はなんの変化のないはずの葉楠の内面はしかし、オーロラのように姿を変え色を変えて、感情をオーラに変換して盗み見していた六花を魅了した。そして、ついつい望みの話をした。どこかで読んだことがあつたから。人間はいついかなる時にでも、望みを手放さないいきものだ。強欲なのだ。そう聞いていたから、葉楠のような人間が欲するものは何なのだろうと気になった。

あれからずっと、人間の感情を観察してきた。まだまだ知らないことはたくさんあるけれど、それでも今ならわかる。ともだちが欲しいと口にしたときの葉楠の瞳に宿っていたもの。あれは、寂しさ。あのとときの葉楠の笑顔。あれが六花に与えた感情は、喜び。

使い魔からの報告では、葉楠は今ほヨーロッパに落ち着いたらしい。社会学の博士号を取得するために大学にいるという。何冊か本も出版されたようだった。きっと、日本には戻らないのだろう。

あのととき、六花のポケットにいれたままだった使い魔の羽根。学ランの代わりにと葉楠にあげたもの。あれを、葉楠は一日に一度、寝る前に手に取る。使い魔のそれが経験するもの全ては、六花にダイレクトに伝わる。葉楠の、無骨だけれど、愛情深い手と指。それを毎日感じていられる六花は、微笑み続けることが出来る。それは

幸せというのではなかったのか。

どの国にいても、どの言語を話していても、例えどんなに時間が経っても、その存在を覚えている。ならばきっと、六花は葉楠のもだちのままなのだ。

それは六花の瞳に優しい陰を落とす。

歴史資料室の中、夕暮れに染まる校庭を見下ろしながら、六花は声の届くはずのない葉楠に語りかける。人間の、なんと不便で愛おしいことか。

「例え世界が君を忘れても、僕は忘れないよ」

狼男の伝言ゲーム(前)

榎沢里奈えのさわりなは、ただのクラスメイトだった。

バレー部に所属していて、そこでは目立った活躍をしていたけれど、その性格というのは、正直目立つようなものではない。

一年生のときに、同じクラスになった。

自己紹介をするときに立ち上がった彼女は、男子の平均身長を超えていたから、野次が飛んだ。顔を真っ赤にして、そのしなやかな体躯とは反対に、小さな声でぼそぼそと話す彼女だけは、覚えてい

でも、それだけだった。

だから、三年になって、また同じクラスになったときも、立ち上がった彼女を見てようやく気付くだけ。彼女の一緒にいる女友達は、一様に、小さく着飾ったことが多かったから、余計に目立ったのかもしれない。

休み時間も、真面目に、体育館に足を運ぶ。バレー部の練習だろう。これも、自分で気付いたことではなくて、彼女の勤勉さを謳うクラスメイトの声が、耳に入ったからだだった。

そのうち、進路を決めなくてはならない時期になり、彼女が、バレー部の推薦を受けて、市外の大学への合格を決めたと耳にした。

そうか、と納得した。

真面目で、勤勉で、暗いわけではないけど、目立つところのない、彼女。

そういうやつの方が、人生ってというのは、上手くいくのかもしれない

ない。

自分の進路も、もちろん、決めた。彼は、学校の成績は、悪い方ではない。というか、あんまりそちらの方面で苦勞をしたことがなかった。運動も出来るし、勉強も苦にならない。人付き合いで悩んだこともないし、自分の将来を憂いたこともない。毎日楽しくて、このまま、自分の人生は楽しいままなのかと思っていたくらいだ。

そういう自分は、最近、戸惑っている。

と、いうのも、かの榎沢里奈が、推薦を蹴つたと聞いたからだ。

そのあと、どういう進路を選んだのかは、知らない。そこまで、仲良くないからだ。もちろん、話せない人間などというのは存在しないので、彼女とも言葉を交わしたことはある。だが、そこまで踏み込んだ話をするには、榎沢里奈は「お堅く」、そして「真面目」すぎた。

進路を、土壇場で変えてしまった榎沢里奈は、進路だけでなく、その性格さえも変えてしまったみたいだ。

よく笑うようになった。

馬鹿笑いというのではない。ただ、笑顔が、目につくようになった。気付けば、笑っている。

物怖じを、しなくなった。前などは、一言目には謝って、瞳を伏せていたというのに。発言が増えれば、その分、その言葉が耳に入ってくる確率も高くなる。

その声はあくまでも爽やかで、存外に、はつきりと物を言うのだと知った。

そして、彼は思った。

オレは、これでいいのかと。

そんなことは、これまでの人生で初めてだったから、驚いた。戸惑った。動揺した、と言ってもいい。

これでいいのか。

そんな心の声が聞こえてくること自体、想像の範疇はんちゆうを超えている。

揺れ動く自分の心を持って余したまま、数日が過ぎる。じりじりと迫ってくる期限日のようで、眉に皺を寄せることが増えた。

どうしちゃったんだ？

自問自答してみる。そんなことさえも、初めての体験だ。

「どうしたの？」

声をかけられて、目を上げれば、かの榎沢里奈が眼前に立っていた。

「お、おお、榎沢」

「何か、眉毛に皺が寄ってるよ？悩み事でもあるの、反田たんだ？」
名前を呼ばれる。

「いや、何でもないよ。それよりさ、榎沢」

本気で心配してそうな榎沢里奈の目が、いたたまれない気持ちにさせる。居心地の悪い感じから抜け出そうと、彼は話題を逸らすこ

とにする。

「何で、推薦、蹴っちゃったわけ？良い大学だったんだろ？」

「うん」

にっこりと、笑う。清々しいそれに、思わず目を細めなくなった。

「ちよつとね。気付いちやったことか、あつて」

「なに？」

「秘密」

結局、答えてはもらえなかった。半ば、本心で尋ねた質問だったのだが。

「え？何、それ。真面目に言ってるの？」

「いや、だからさ。あたしも、初めは信じられなかったんだけど。そついう、噂があるっていうのは、本当みたいだから」

クラスの女子から、榎沢里奈に関する噂を聞いた。

曰く。彼女は、ここ、くめさと糸里高校に代々伝わる話に手を出したのだと。

その話については、彼も承知のことだった。

曰く。糸里高校には、夜間部というものが存在し（そんなものが存在しないのは、周知の事実のだが）、そこでは、自分の欲しいものが手に入るといふ。願いをきいてくれる存在がいるらしいとのことだが、そこは眉唾ものだ。と、いうのも、この世知辛い現代で見返りなしに、そんな面倒臭いことをする、酔狂な人間がいないと知っているから。もちろん、その相手が、人間でないのならば、ま

た話が違ってくる。しかし、人間以外の存在って、何だ？という話になるので、それはまたそれで、眉唾もの。

どうやら、榎沢里奈は、そこに出向いたらしい。

どこから、そんなことが広まるのかは知らないが、反田はそれに興味を持った。

昔から、気になったら、すぐに行動に移すタイプだった。

というわけで、今、反田は、件の夜間部を訪れていた。

夜の学校に侵入するなんて難しいのでは、というのは杞憂だったようだ。誰の不注意か、一階のトイレの窓が開いたままになっていた。そこから、体をスライドさせるようにして、反田は大した苦労もなく、校舎へと足を踏み入れていた。

上履きに変えるべきなんだろうか、とか思ったりもしたが、面倒臭いので、その思考を無視する。

最上階にある、使われていない歴史資料室。

そこで、どうやら、その夜間部とやらは活動をしているらしい。

おかしい話ではないか。夜間部、と銘打つのならば、少しは学業への関心を見せても良い。なのに、歴史資料室とは。あんな小さな部屋で、一体、何の授業をすると言っのだろうか。

まあ、深くは考えないでおくか。

その部屋は、予想以上に簡単に見つかった。しかも、警備員にも見つからずに、だ。楽観的な反田の予想を超える、というのはつまり、ものすごく簡単だった、ということになる。警備員の仕事は、警備ではないのかもしれない。

取っ手に手をかける。

さすがに、少しときどきした。

押ししても引いても開かない。引き戸かと思って、スライドさせようとしたけれど、それも徒労に終わった。

「ここまできて、こんなオチかよ」

呟いて、扉に背をつけて、座り込んだ。

正確に言うと、座り込もうとして、扉に吸い込まれた。

言葉にすると、明らかに胡散臭いが、それが一番正確な描写だったりする。

「え、うわ、うわわわわわ」

両手を虚空にはたばたと突き出して、そのまま、後ろに傾いた。ごん、と後頭部を床に打ち付ける。

くわんくわん、と頭の芯でタライが回るような金属音がする。

「いつてえ……」

涙目になってしまって、それが、一人だと言うのに恥ずかしかったので、目をぎしぎしとこすった。

「ようこそ」

「……」

指で覆った視界の上から、声が聞こえてきて、びくつとする。指を外せば、こちらを覗き見る顔があった。

真っ黒。それが、そいつの第一印象。髪も黒けりや、目も真っ黒だ。しかも、着ている学ランまで真っ黒だ。その中で、真っ白い肌や、やけに赤い唇なんかも目につくことはつくのだが、圧倒的に記憶に残るのは、その黒すぎる黒。

「誰だよ」

「糸里高校夜間部、生徒会長を務めています、不知火六花です」

「まじかよ」

「まじです」

黒い生徒会長は、何故か嬉しそうに微笑んだ。

使われてない割にはさっぱりと片付けられているその部屋で、反田は黒生徒会長と向き合っていた。ご丁寧に、机が一台、椅子は二脚ある。机を通して椅子を向かい合うように並べて座ると、まるで教師との面談のようだった。違うのは、どちらも学生だということだ。といっても、相手が学生なのは、甚だ怪しいものだが。

「それで」

いつまでたっても、にやにやと微笑んだまま、何も言おうとしない黒生徒会長にしびれを切らして、反田が口を開いた。

「ああ、汐藍せきあ。ありがとう」

しかし、黒生徒会長は、反田の方には見向きもしないで、明後日の方向へ頷きかける。この部屋には、自分と彼以外、いない筈。訝しんで振り返ると、いつのまに居たのか、一人の小柄な少年が立っていた。手には、マグカップのふたつ乗った盆。

ビーグル犬の耳くらいたれた目をした少年は、人なつこく、反田に微笑みかける。

「こんばんは」

「こ、こんばんは……」

あまりにも自然なその挨拶に、どこから現れたのかとか、どこからその飲み物を持ってきたのかとか、色々突っ込むことも忘れて、素直に挨拶を返してしまう。

「粗茶ですが」

新妻の微笑みでそう言うと、たれ目少年は、ぺこりとお辞儀をする。そして、すうっと消えてしまった。

「ええええええ！」

大声を上げて、ついでに立ち上がって、反田は全身で驚きを表現したのだが、黒生徒会長は一向に意に介さない。どころか、反田のそんな挙動を、興味深そうに眺めているだけだ。

「今の、やつ、さ」

それだけを必死で絞り出す。

「空生汐藍^{たかふゆ せきあ}。会計です」

「あ、ああ、そう……」

そこじゃないんだけど。

「どつぞ」

完璧すぎて虫酸が走りそうな笑顔で、たれ目少年が置いていったマグカップを勧める。ほんのりと湯気を立てるそれは、このトンデモ部屋において、唯一、見慣れた、そして期待通りのものだったから、反田は安心してそれに手をかける。

さて。

どつして切り出せば良いのだろうか。

マグカップの中身は、何の変哲もない、ただの日本茶だった。ますますもって、どこでいれてきたものなのか、理解に苦しむ。ここは、最上階。家庭科室はこの階下だが、この部屋からは随分と離れている。何より、ここへ入るには、どうやったってあの扉を通って来なければいけないわけだから、気配をまったくさせなかったどころか、あの少年は物音さえ立てなかったということになる。それは、まさか、もしかして、例の噂の、ありえないとは思うが、あれだろうか。その、人間じゃない、とかっていう。

なんてことを考えて、心の中でじつとりと嫌な汗をかいていたから、黒生徒会長のにやにや笑いに気がつかなかった。それが、自分を至近距離で見つめていたことにも。

「な、何すか」

相手の年齢は分からないし、年上には見えないのだが、年下にも見えない。黒目の多い、その大きな瞳が、いやに威圧的で、ついつい先輩と話すみたいになってしまった。いかんいかん。もっと、普段の自分でないと。見くびられるだろう。

「たんだしゅうや反田将矢。糸里高校普通科、三年C組。成績優秀、運動神経も良いので、多方面からの部活動への誘いが絶えないが、本人は三年間、部活動には属せず。ついこの間の進路相談では、市外の国立大学への推薦入学を希望した」

絶句する反田に、尚も張り付いた笑みを深くして、黒生徒会長は小首を傾げる。

「ですよね？」

「だ、誰なんだよ、あんた」

「僕は、不知火六花。それ以上でも、それ以下でもありません。とにかく、今宵のお客様は、反田さん。あなたです。僕のごことは、ええと、こういうときは……」

すらすらと話していたかと思えば、その細い指を唇にあて、考え込む。

「思い出しました。僕のごとは、棚に上げてしまいましたよ」

「？あ、ああ……」

使い方が、違う気がする。

「それで？」

黒生徒会長は、依然、毛穴を観察出来そうなくらいの近距離のまま、反田に何かを促すように言う。

「え？」

何のことが分からずに、聞き返すと、

「ここへ、何をしに来られたのでしょうか？」

「そ、それは」

頭をフル回転させて、反田は考えを巡らす。

「その前に、質問がある」

「ええ。なんなりと」

「ここは、自分が欲しいものを見つけられる場所だと聞いた。間違いは、ないか？」

「なるほど。今は、そのようにして、人間の口では呼ばれているのですね。こつこつこのを、何と言ったか。尾ヒレに肩口―ス？」

「尾ひれ背びれがつく、だろ」

「そう、それだ。ありがとうございます」

粛々と、頭を下げられた。いや、どういたしまして、と口の中で呟いたのだが、聞こえただろうか。

「その、尾ひれ背びれがついてしまっているみたいですね。元々、この夜間部というのは、僕が設置したものなんです」

「だよな。だって、糸里に夜間部なんて存在しないから」

「はい。でも、夜間部は、存在していましたよ。ずっと昔から。」

あなた方人間には、迷惑をかけないようにと、なるだけ接触を少なくしてきましたから、気付かれなかったのも、無理はないと思いますが

またしても、意味の分からないことを言われる。眉根を寄せ目を凝らして、聞き直すジェスチャーをしてみたのだが、どうやら伝わらなかったらしい。反田の仕草に、目を見開いて喜んだ風に笑うと、黒生徒会長は、また語り始める。

「ここでは、あなたの望むものが、ひとつだけ手に入ります」

「ひとつだけ？」

「はい。ひとつだけ」

「何でも？」

「はい。何でも」

「いくら、するんだ？」

「はい？」

「だから。その、願いとやらをさ。叶えてもらうには、払わなきゃいけないわけだろう、お金とかさ。いくらかかるんだって」

「ああ、そういう意味ですか。ええ、それは、一銭も頂きませんよ」

「嘘くさいなあ」

「でも、本当の話です」

「本当かよ」

一人ごちるように言うと、笑顔のままの黒生徒会長は、懐からおもむろにメモパッドとボールペンを取り出した。反田の存在をまったく無視して、そこに何かを書き込む。

「ちょっと。何やってんだよ、それ」

思わず声をかけてしまった反田に、ゆっくりと瞬きを二回すると、黒生徒会長は、純真無垢な笑顔を作った。

「メモを取っています」

「わかっているよ、そんなことは。何で、今、メモを取っているのかって聞いているの」

「それは、もちろん、今、反田さんが、メモすべき言動をお取りになったからですよ」

「オレが？」

「ええ」

「今？」

「ええ」

「意味わかんない」

「ええ」

まったくといって良いほど、話がかみ合わない。少しばかり、不安になってくるが、そこはそれ、気を取り直すと同時に顔を上げた。

「じゃ、ただなんだな？」

「ええ。お金の類は、僕たちは必要としていませんから」

「は？ってことは、他の何かは必要としているのか」

「……ええ」

「それは、一体、何なんだ？」

「それは、お答え出来ません」

「何で」

「あなたの望みごとによって、変動しうるものだからです」

「何だよ、それ」

「さて。あなたのお望みは？」

「それは……」

言い淀んでいると、黒生徒会長が、先ほどのメモを取り直すと、ばらばらとそのページをめくった。そこに何が書いてあるのかは、清々しいほどに不明だが、そこに何か書かれているのは確かだ。何かを探すようにページをめくり、そして、お目当てのものを見つけたらしい。

「反田さんの欲しいものは、女ですか？それとも、お金？それとも、権力？」

「どういう質問だよ」

「あれ？違いますか？おかしいなあ。人間というのは、大体、このみつつが欲しいのだと聞いたのですが」

「政治家のおっさんじゃないんだからさ。オレ、まだ、高校生だよ？」

「年齢が、関係してくるのですか？それとも、職種？」

「どつちも」

好奇心、と瞳に彫り込んであるのか、黒生徒会長が、その頬が触れそうに近い距離で聞いてくる。男のくせに妙に整った顔が近づいてくると、男だと分かっているのに、少しどきどきしてしまって、そんな自分に幻滅してしまって、つい投げやりに返してしまう。

「なるほど……」

それでも、真摯に頷くと、黒生徒会長は、そのメモ帳にまた何かを書き込んだようだった。

「オレの欲しいのは、そうだなあ、何だろう」

オレは、オレが分からない。

自分に、呟いてみる。

オレは、何を考えている？オレは、何で迷っている？どうして、迷っているのか。これから、どうすればいいんだろう。楽しいままで、ここまでできたのに。どうして、楽しくないときが、最近はあるりするんだろう？

「オレと、向き合いたい。今、オレが、あんたとこうして話し合ってるみたいにな」

なんてな、と一笑にふした。

のだが、黒生徒会長は、ふいにその眼差しを真剣なものにすると、反田の瞳をのぞき込んだ。吸い込まれそうな漆黒の瞳が、こちらを見ている。見透かしている、と感じた。自分の顔よりも、自分の表面よりも深いどこかを、この男は見ている。そう思った。

するりと、黒生徒会長の体が離れる。

そこでようやく、圧迫感を感じていたことを、反田は知った。

「今、係の者を呼んで参ります」

優雅に会釈をして、反田の側を通り過ぎると、扉の向こうに、消えていってしまふ。不思議と、足音のようなものは聞こえなかった。

残ったのは、机が一台に椅子が二脚。その上に乗った、冷めた日本茶の入ったマグカップがふたつ。そして、反田。

今、自分が感じているのは、何だろう。

期待？

不安？

それとも、虚無感？

狼男の伝言ゲーム(中)

どれくらいの間、待たされたのだろうか。

何の前触れもなしに、後方から声をかけられた。

「お待ちせいたしました、反田将矢さん」

思わず、肩がびくりと震えた。気配もしなけりや、扉が開いた音さえない。加えて、真意がつかめない、ぬらりぬらりとしたこの声音。ホラー映画よりも、余程臨場感のあるサスペンス。

「お、おう……」

ただ、びびっていると思われるのは、男の沽券に関わるので、精々ゆったりと構えた態度で答えた。

「これが、今回の担当者です」

ぐるりと机を回って、反田の目の前にやってくると、黒生徒会長は、心なしに嬉しそうに隣に立つ人物を指した。

これ扱いてというのは、非道いような……。

「よろしく！反田くん！」

詐欺師の声を持つ黒生徒会長とは対極的に、夏の海を思わせる、爽やかな声音で挨拶をされた。

顔を上げてみれば。

またしても、反田は絶句してしまふ。

すらりとした体躯は、黒生徒会長と同じく、桑里くめさと高校の正規の制服ではない、黒の学ランに包まれている。モデルのような体型だ。モデルを間近に見たことはないが。

だが、特筆すべきは、その恵まれた身体だけではない。というか、それすらも霞むほどのインパクト。それは、その髪と瞳。

髪は、どうすればそんなに真っ二つになるのかと、首を傾げたくなるほどに、ツートンカラー。しかも、黒と銀。黒は、まあ、アジア人的にはポピュラーな色味なので、この際置いておくとしても、銀色は、おかしい。違和感がありまくる。反田とて、校則で禁止されているものの、休みの間だけなど、期間限定で頭髪を染めたことはある。断言しても良い。こんな銀色は、アジア人の色素では出ないはずだ。

そして、その両目。これまた、カラーコンタクトでは到底出せない、ブルーグレイ。丁度、狼なんかがこういう目の色をしている。そう連想して、その髪の色も、狼を思い出させるかと思った。

何か、新手的、コスプレなのだろうか。

「えっと」

何か言わなくては、と、何故か焦って、意味のない言葉を口にした。

二色頭の男は、反田の戸惑いなど歯牙にもかけず、

「今回、反田さんの願いを担当させていただきます、白銀粉はくぎんこ伝馬てんまです。よろしくな」

「あ、よろしくつす」

屈託なく笑われて、ついでに手を差し出されては、ついつい反田

もそれを握ってしまおう。

「では、伝馬。後はよろしく頼んだよ」

「おーらい。あ、六花^{りっか}。どこ、使えば良い？」

「どういった場所が、一番適切？」

「うーん。広いところ、かな」

「じゃあ、体育館でも使えば良いよ」

「誰もいない？」

「誰もいなくさせよう」

「じゃ、その辺は、六花に任せるよ」

反田の手を握ったまま、首だけを黒生徒会長に向けて、二色頭が会話をこなす。

その内容がちんぷんかんぷんなのもそうだが、繋がれたままの手に、段々と違和感を覚える。

「じゃ、行こうか、反田くん！」

無意味に大きな声で誘われた。手は、繋がれたまま。

「あの、手、手を、ですな」

「ああ、ごめんごめん。おれ、子供のお守りとかが多くてさ。ついつい、こつやつて手を引く癖がついちやってんの。あ、反田くんのこと、子供扱いしてるとかじゃ、ないからな。その辺、誤解のないよーに」

「はあ」

「じゃあ、手も離れたところで、行きますか」

「行くって」

「うん。広いとこのがいいかと思ってさ、今、六花の使い魔が、体育館に人が近づけないように陣を張ってくれてるところだから。ゆ

つくり歩いていけば、丁度良い頃合いだと思つよ」

「使い魔？陣？」

「あ、あれ？六花から、説明受けてない？」

不審げに首を振ると、たちまち、二色頭は、冷や汗をかいて乾いた笑いを洩らす。

「あーららら。あ、そう。そうか。そうか。そうか。説明は、まだか。やっぱいな、てことは、おれが説明しなくちゃなんないのかな？説明、苦手なんだよなあ」

ひとしきり、独り言をわめき散らすと、よし、と両手の拳を胸の前で固く握る。

「反田くん。君の願いつてのは、自分と向き合うことだったよね？」

改めて、他人にそうやって言葉にされると、ザ・青春といった感じで、恥ずかしい。反田は、眉根を寄せつつ、小刻みに何度か頷いた。

「ここへは、どうやって来たの？あ、徒歩、とかじゃなくてさ。

えつと、この、夜間生徒会のことは、どうやって知ったのかって意味なんだけど」

「人から、聞いたただけけど」

「そっか。でも、うーん、こんなこと言うと失礼だけど、反田くんて、そんな、根も葉もない噂を、丸呑みにしちゃう人？そうは見えないんだけど」

「それは、違うけど。なんつーか、ここに来たことがあるってやつが、オレの知り合いだったから」

「後学のために、その知り合いのひとの名前を聞いても良いかな」
榎本。榎本里奈

「えのもと、りな、えのもと、りな……。ああ！^{たまき}瑶の担当の！うんうん、覚えてる」

ブルーグレイの瞳を細めて、二色頭が言う。

「何、あんた、榎本に会ったの？」

「ううん。おれは会ってないよ。直接、榎本さんに会ったのは、六花と、担当者だっ瑶だけだと思う。でも、依頼人たちが、夜中、無事に家に戻るまでを見届けるのは、おれの仕事だから。すごく良い顔して帰っていったんだよね、あのこ。そうかそうか、反田くんは、榎本さんの知り合いかあ。それで？榎本さんが、ここに来たら、自分もここに来ようと思ったの？」

「いや、まあ、うん、そういう感じ」

「はつきりしないなあ」

「その、榎本がさ。ここ、夜間生徒会？っていうの？ここに来てから、何か、変わったんだよ。それで、だから、何でかなって」

「なるほどー。気になっちゃったわけだ。榎本さんが、あんまりにも、魅力的になつてたから」

「いや、そんなこと言っていないけど！」

「またまたあ。いいよ、いいよ。いやあ、青春だねえ」

二色頭の、勘に障る物言いに、反田は耳まで真っ赤にしながら、
尚も抗議した。

「だから！違つて！ただ、だから、その、ただ、何でかなって思っただけだよ。それだけ。本当に、それだけだから」

「じゃあ、まあ、そういうことにおきましようかねえ。あれえ？でも、だったらどうして、反田くんの願いは、榎本さんの変化の原因が知りたい、じゃないの？」

「それは……」

飄々とした態度の割に、この二色頭は、鋭くひとのことを観察している。

返事に窮する質問に、反田は、嘆息すると、

「それは。榎本のせいで、オレの調子が狂っちゃったから」
突き放すように言った。

「なるほど」

一言、二色頭が呟く。笑顔もそのままなのに、細めた瞳もそのままなのに、何故かそれは、さつきとは別人のものようで、反田は違和感を覚えた。

「じゃ、さつきの説明に、戻りまーす」

がらりと雰囲気を変えて、底抜けに明るいつ調子で、二色頭がバスガイドのように片手をあげた。

「えつとね。この、夜間生徒会っていうのは、さつき反田くんが会った、不知火しらぬい六花りっかを生徒会長にしています。で、オレが副会長。

あと、宇生たかおき鳴璃めいりって議長と、空生たかふゆ汐藍せきあって書記がいるんだけど。会った？」

「垂れ目になら」

「あ、じゃあ、それが、汐藍。鳴璃は、ものすんごいつり目だから。で、こうやって、反田くんみたいに、依頼人がやってきて、その願いを六花がとりあえず、聞く。その願いの種類によって、担当者ひとり、呼ばれるってシステムになってるんだ」

黒生徒会長が、手もつけなかった日本茶に、二色頭は躊躇いなく

手を伸ばすと、一気に飲み干した。

「もう、何年になるかなあ、この生徒会を発足させてから。まあ、隠しているわけではないから言っちゃうけど。おれたちは、全員、人間ではないんだよね」

「は？」

あまりにも突拍子のないことで、反田は頭の奥から声を出す。

こいつ、頭おかしいのか？

じつとりと二色頭を見ると、頭を掻いて苦笑した。

「うん。そういう反応をされるとは、思っていたけど。ここはね、六花のための機関だから。六花の願い事を叶えるためのもの。たまたま、依頼人の願いと、こちら側の要求がマッチしてしまっただけで、人助けの慈善事業ではないんだ。そこ、誤解しないでね。おれたちは、人間に対して、何の感情も抱いていないんだから」

軽く言つてのける二色頭は、薄気味の悪い笑みを浮かべていて、反田は顔を顰める。

「まあ、紆余曲折ありまして。今の形に収まっているのは、事実だからさ。えっと、だから、うん？おれ、何が言いたいんだっけか……。ああ、そうだ。そうそう。だから、まあ、今夜、反田くんが信じられないような光景を見たとしても、おれたちでは、保証しかねるってこと。それから、反田くんの願いは、叶えられるだろうけれど、それに伴う諸々のことについては、おれたちは、ノータッチだから。その辺、ご理解いただけますでしょーか？」

ウインクをひとつ。男から、ウインク。鳥肌がたつ。
無意識的に自身の二の腕をさすりながら、反田は、それでも、頷
いた。

「いいよ。別に。何だってさ」

「それじゃあ、陣も張られた頃合いでしょうし、行きますか」

からりと笑って、二色頭が、反田の手を引く。

「いざ、体育館へ！出発、しんじーうー！」

だから。手を離して欲しい。

反田の、その願いが叶うのは、もう少しあとになるようだった。

狼男の伝言ゲーム(後)

「さあさあ、着きましたよ！」

不必要に大きな声で、二色頭が古き良き時代の給仕係の仕草で、反田を体育館に招き入れた。

当たり前のことだが、人影のない体育館は、いつもよりも広く大きく、そして、非友好的に感じられた。

未だ、二色頭に信頼を置いたわけではない。

何しろ、連れだって歩いているあいだ、彼の瞳がきらりと光ったからだ。まるで、犬猫だ。そんなの、ありえない。非常識だ。そして、そんなものを信じてたまるか、と反田は心底で、猜疑心の塊になっていた。

「じゃーまあ、ね。反田くんも、暇じゃないんでしょうし。ちやっちゃんか始めちゃいますかー」

反田と二色頭が、ちょうど、体育館の真ん中辺りに来ると、お気楽な調子でそう言う。ぱちんと指を鳴らした。音を吸収するものがないので、それは随分と長い間響いていた。

そして、その反響音が消えたとき。

反田の目の前には、反田が立っていた。

いや、反田本人がここにいるのだから、それは、反田ではないのかもしれない。だけれど、そっくりな別人として片付けるには、あまりにも似ている。顔かたちだけではない。背格好だけでもない。

すべて。雰囲気。そういったものが、反田将矢という人間に酷似していた。

「……っ!？」

驚愕のあまり、後ずさると、何かにぶつかる。思わず振り返って、顔から血の気が引いた。そこにいたのは、反田だったからだ。

鏡に映った自分、とか、実はここが鏡張りだったとか、リフレクションを応用したマジックなんかではないのは分かっている。

じゃあ、何だ。

これは、何なんだ。

唯一、反田本人と違うのは、一様に、制服に身を包んでいることだけ。

しかも、反田のまわりには、反田のクローンのようなものが、うようよと集合してきた。誰も、何も言わない。ただ、反田を囲むようにして、それらは沈黙したまま、立ち尽くしていた。その視線は、すべて、私服の反田に向けられている。

何の冗談だ、巫山戯るのもいい加減にしろ。

そう怒鳴ってやりたくて、二色頭を探す。本来なら見つけやすいであろうそれは、しかし、何故かどんなに探しても見つからなかった。

「何なんだよ、これ。誰なんだよ、こいつらは!」

放っておけば、びびってしまいそうな己を鼓舞するために、わざ

と口に出してみる。

「オレは誰なんだろう」

「え？」

ふいに、斜め後ろから声が聞こえてきた。それは、紛れもない、自分自身の声。客観的に聞くと違和感はあるものの、それは反田の声だ。

斜め後ろに立つ、反田のクローンが、同じことを口にした。

「オレは、誰なんだろう？」

「何、言ってるんだよ。これは、何の冗談なんだ」

「冗談？これが、冗談に思えるのか？」

今度は、真横で声がした。

「冗談じゃなかったら、何なんだよ」

「冗談でなかったら？」

「現実でしか、ありえない」

「でも、現実でだって、冗談は起こりうる」

「だったら、これは、冗談なのか？」

「誰の？」

「誰の冗談なんだ？」

自分の声が、四方八方からする。反田の頭の中に、すでによぎった言葉たちが、クローンのようなものたちの口から発せられる。

分からない。何なんだ、これは。誰か、説明してくれ。

パニックの波が、押し寄せる。額には、嫌な汗が噴き出し始める。

下手に何かを話せば、また、今のように、クローンたちが一斉に喋るのだろうか。

怖い。

自分の思考を、他人の口から聞くのが、怖い。

それ以上に、自分が自分に問い詰められるのが恐ろしい。

「だめだよ、反田くん」

ふいに頭上から、二色頭の声がして、頭上を仰ぎ見るけれど、その姿はどこにも見当たらない。そのまま、きよろきよろと首を動かすと、更に声が出た。

「だめだめ。探しても、おれは見つからないよ。そういうもんだから。それよかさ。反田くんのために、用意したんだから、このひとたち」

「お、お前なのか、これ！趣味の悪い冗談だな、早くやめさせるよ」

どこへ声を返しているのかわからなかったけれど、とりあえず、上空に向けて大声を上げた。

「怒らない、怒らない。反田くんの、お願いだったでしょー」

「オレの？ 願いだと……？」

「そう。反田くんが言ったんだよ？ 自分と向き合いたいって。だから、呼んできたんだから、このひとたち」

「っ、だ、誰なんだよ、こいつらは！」

「反田くんだよ？ 見ての通り」

「お、オレ？」

「そう。人間ってのは、心の中に、何人もの自分を抱えてる。それを、全員、呼び集めただけだよ」

心の中に、何人もの自分がある？それは、人格ということか、側面ということか……。

どちらにせよ、これだけ大勢の「自分」に囲まれるのは、気持ちの良いものではない。

「反田くん、質問があるんでしょ？自分に。聞いてみるといいよ。みんな、答えたくてうずうずしている筈だから」

そう言われるけれど、見渡す限りの自分の顔は無表情で、そこから何かを汲み取ることは、至難の業に思われた。

「う、うずうずしてるんなら、何でも言わないんだよ。どうせ、人形かなんかなんだろっ」

「だって、反田くんの質問にしか、答えないようになってるから。おれが何言ったって、そんなの、意味がある？反田くんの人生に、何か影響ある？」

大アリだ。トラウマになる。

「ほらほらー。ちゃんと聞いてみてよー」

急かす声には、どこか、楽しげな響きもあって、それが憎たらしかった。

「くそっ」

誰にもなく詰ってから、盛大に眉を寄せて、ため息をついた。

「お前、名前は？」

「反田将矢」

大勢のうちの一人が答える。

「年齢は」

「十八歳」

「家は」

「そんなことが聞きたいのか？」

自分に、冷たくあしらわれて、猛然と腹が立つ。

「おい！二色頭！」

「……それって、もしかして、おれのこと？」

「お前以外にいねえだろう！」

「うん。もっと他に呼び名が……。まあ、いいか。何ですかー、反田くん？」

「質問に、質問で答えられたじゃないか！どうなってんだ！」

「だって、そんな下らない質問、自分でも分かってるでしょう。」

小学生じゃないんだからさ。そんなこと聞かれて、反田くんなら、何て答えるのさ」

「そんなことが聞きたいのかって……あ」

「ほらあ。そういうこと。メインじゃないからって、オリジナルじゃないってことではないんだよ。ちゃんと扱ってあげないと」

「は？どついう意味……」

「おれと話す暇があったら、自分に質問してあげてくださいーい。もう、おれは口出ししないからね」

「おい！」

声を荒立ててみたけれど、全くの無反応。本当に、もう何も言わないつもりなんだろうか、あの二色頭。

「質問ったって、何を聞けばいいのか…分かるかよ、そんなこと独りごちたつもりだったが、

「じゃあ、質問すればいいのか、こっちが」

少し離れたところにいるクローンが、口を開いた。

目を見開いて、絶句した。確かに、それは妙案だと思ったけど。誰かがそう口にしていたら、同じことを返したとは思っけれど。

「そ、そうして、くれるのか」

空からになった喉で、返答すると、周りのクローンが一斉に頷いた。

「では、質問。毎日、楽しいか」

「た、楽しいよ」

「友達のせい？」

「それもある」

「家族のせい？」

「それもある」

「学校のせい？」

「それもある。ひとつじゃねえだろ、理由なんて」

「では、榎沢里奈は？」

「は？おい、ちょっと待て。何でそこに榎沢が」

「どうして、榎沢の姿を目で追う？」

「追ってなんか」

違う。追っている。しかも、無意識に、だ。気付くと追っている。

「なのに、何故、榎沢に話しかけない？」

「それは、だから、オレは別に、親しくないし」

「榎沢以外の、特に親しくない人間とは話せるのに？」

「違う、だから、そうやって、榎沢を特別視するのはやめろ」

「特別視？そう思ったのは、自分だろう」

「違う、お前が、そういう、ニュアンスで言うから」

「オレは、お前だ」

「違う、オレは、オレで、オレ以外のオレは」

「親に対する自分、友達に対する自分、教師に対する自分、それもすべて、同じだと？」

「そうだよ、同じだよ」

「まったくの同一人物？」

「そ、そうだよ！」

「それが真理ではないことを、自分でも分かっているのに、どうして、それを認めない？」

「何、言ってるんだよ」

「何故、自分を均一化したがる？」

「均一化なんて、してない」

「統一と画一は、同じものではない」

「知ってるよ！」

「何故、否定する？」

「否定？何の話だ、何を否定するっていうんだよ」

「自分を」

「オレを？」

「何故、自分を否定する？」

「オレが、オレを？違う、それは、違う。オレは、毎日楽しくや
ってるし、否定なんて、してない」

「しかし、認めてもない」

「認めてる！ちゃんと、オレは、オレのことを」

「自分の多様性も認めていないのに、自分のことを認めていると
？」

「だから！何なんだよ、その、多様性って。オレは、そんなに大
層な人間じゃない！」

「それは、誰の評価だ」

「オレのっ！オレのだよ！オレに対する、オレ自身の評価だ！」

「他人からの要望を、自己評価に置き換えていると、分かってい
ても？」

「何なんだよ、分かっているって。そんなの、初耳だよ。何でオ
レが、そんなこと知ってるって決めつけるんだよ」

息が、自然とあがってきた。苦しい。呼吸をするのが、とても、
辛い。

「それは、我々が、お前だからだ」

「何言ってるんだよ、オレが、そんなお堅い話し方するわけないだろっ」

「これも、お前の一面。側面にすぎない」

「今のお前も、お前。我々も、お前の一部」

「榎沢は、どうして、自分と向き合えることが出来るようになったんだろっ」と、ずっと気になっている

「自分が、本当にやりたいことを見つげるためには、どうすればいいんだろっかと」

「それを見つげるためには、反抗もしなければならぬのかと」

「他人の評価に傷をつけたくないと、恐れている」

「しかし、このままの評価でも終わりたくない」と

「いつか、自分のありのままをさらしてみたいと」

「長い間、そう、願いながら、笑顔を貫いてきた」

「そうすれば、誰も傷つかないから」

「楽しいことだけをしていれば、誰も傷つかない」

「その代わり、何も、手に入らない」

「榎沢は、何かを手に入れたんだろっか」

「あの、二色頭が、榎沢はいい顔をしていたと言っていた」

「うらやましい」

「まぶしい」

「あんな風に、なりたい」

「あんな風に、自分を貫いてみたい」

「あんな風に、自分と向き合ってみたい」

「これは、すべて、お前の側面。お前の一部」

「お前は、ひとつではない」

「反田将矢という人格は、多面的であって、決して、お前だけではない」

「やめろ、もう、やめてくれ！」

そう叫ぶと、肩でせいぜいと息をした。声は、小さくなりながら、わんわんと体育館の中を旅し続ける。ぴたりと口を閉ざしたクローンを睨んで、反田は、一言だけ呟いた。

目眩のする頭を、必死で押さえつけながら。

「分かってんだよ。全部。お前らなんか、言われなくても」

トレイにふたつ、ティーカップを載せて、伝馬が歴史資料室に入ってきた。

湯気を立てているそれを、窓際に佇む六花に手渡す。

名残惜しそうに校庭を眺めていた六花は、それでも、伝馬の方に向き直ると、黒曜石のような瞳を細めた。

「反田さん、倒れたらしいね」

あゝ、とぼつが悪そうに、伝馬が目を逸らす。トレイを机の上において、ティーカップを手にしてから、空いた方の指で、ぽりぽりと頬を搔いた。その一連の仕草を、六花は微笑をたたえたまま、見

守っている。

「ごめん！」

片手を縦に、顔面につけて、伝馬がぎゅっと目を瞑って謝罪の言葉をお口にすする。六花は、可憐に小首を傾げてみると、

「何を謝っているの？伝馬」

「あ、あれ？怒ってるんじゃないの、六花」

「怒る？僕が？何に對して？」

「えーと、だから、それは、その、反田くんが倒れちゃうまで、おれが追い詰めちゃったことに対して？」

「へえ？そういう理由で、怒ったりするものなのかい、人間は」

「いやまあ、うん、そういうこともあったりするかも」

「人間とのハーフの君が言うんだから、間違いないだろう。そうか。なら、教えてくれ。僕は、どうやって怒れば良いんだい？」

「無理して怒る必要はないと思うけど」

「そうなのか？」

「うん。怒るポイントなんて、人それぞれだし」

「そうか……」

ふむふむと素直に頷くと、六花は興味深そうに、怒っても良いし怒らなくても良いのか……と呟いている。

ややあってから、顔を上げると、いつもの微笑みを浮かべていた。何も言わずに、話の先を促す六花に、敵わないなと伝馬は苦笑する。一度、カップの中の液体で喉を潤してから、姿勢を改めた。

「反田くんは、案外優しかったみたいだね」

「でも、学校での評価は、不真面目でお調子者で楽観的だと聞い

ているよ」

「そう。そういう風に、思われてただけ」

「仮の姿ということ?」

「いや、あれも、立派な反田くん的一面だよ。でも、全部じゃない」

「伝馬。良く分からない」

「だからさ。たくさん感情が、同時に存在するのが、人間なわけ。それが、自然な状態。それを、無理矢理、ひとつの感情、ひとつの人格だけにしてしまうと、そこに矛盾が生じる。それに気付くと、辛い目に遭う。だから、見ないようにする。そうやって、反田くんはずうつとやってきたんじゃないかな」

言ってから、反田の落ち着かない瞳を思い出した。間近で見れば、澄んだ瞳をしていたのに、決して目を合わせようとしない、まだまだ幼い魂を宿した瞳。

「ふうん」

紅い唇を形良く歪めて、六花が呟いた。ティーカップを口につける様さえ、人形のように、まるで現実味がない。

この分だと、全然、おれの言ったこと理解してないなあ。

もう一度、噛み砕いて説明する必要があるか。

そう思って、伝馬は頬を緩める。手のかかるこほど愛おしいとは、よく言ったものだ。

「ねえ、伝馬」

「ん?」

「反田さんの願いは、叶った?」

「ある意味、究極の願いだからね、反田くんのは。でも、そうだな」

「？」

「人の目くらいは、見れるようになるんじゃない」

「伝馬。人間の目は、特殊な能力でもないと、見れないものなのかい？」

違う違うと笑って視線を向けた先は、校庭。夕闇が訪れようとしている。この色は何と名付けるか。ピンクというか、紫というか。紺かもしれない。でも、結局は、どれだって同じこと。

移ろいゆくものに、心を揺らせられること。それが、人間の醍醐味ってもんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5547d/>

Your precious wish is my precious treasure

2010年10月9日19時59分発行